
贖罪の忌み子

蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贖罪の忌み子

【Nコード】

N6012R

【作者名】

蝉

【あらすじ】

これは一人の少年が人間として失敗する前のお話。その少女と出遭ってしまった物語。鬼畜外道は寄っといで。悪逆非道も見てらっしゃい。嗤える道化ならここにいます。

前置き代わりの言い訳

語るに足りない、語るに至らない、我が人生の一部をもし俺がこの場で話してみせたとして、そこに何が生み出されるわけでもなければ、失うわけでもない。つまりは何もどうにもならないというところで、果てしなく無為で、限りなく無意味な時が流れていくだけであり、本当、時間の無駄以外の何ものでもない。

まあ、強いて言うなら、語るにつれて自分の中の虚無感が、そのカサを増していくだけに過ぎないのだけれど、でも、俺の中で、そのやりようのない虚無が、いったいどれだけ増えていったとして、それは海に淡水をせっせと継ぎ足すのと同じようなものであって、今更何も変わりはいしないのだが。

傷跡だらけのこんな俺が、今更力サブタの一つや二つをべりべりと剥がされたところで、何を動じる必要があるというのか。

そして、語るとするなら、いったいいつの時代から話し始めたらいいだろうか。やはり、俺がまだ『ぼく』だった時の頃から話せばいいのかもしれない。

まだ俺にも、人間味というものがあった時代。

まだ俺なんかに人間という言葉がふさわしかった時代。

そう、俺がまだ幼かった時分。

彼女にも、その頃に出会った。

出会うべくして、出会った彼女。

必然——なんて、俺がもっとも嫌いな言葉なのだけれど。

彼女との邂逅は、多分、そういうものだったのかもしれない。

まあ。

いずれにせよ、人間を失敗してしまった俺にとって、過ぎ去った物事には未練はないし、後悔もまた皆無だ。

仮にタイムマシンなるものがあつたとしても、俺は決してそんなインチキ臭いものには頼らないであろう。むしろ、興味すら示さな

いのではないか。

だって、例え過去に戻ったとしても、俺はきつと同じことを繰り返す。同じように繰り返すことになる。何故なら、俺は俺であって、俺以外の何者でもない以上、どんなルートを辿ったとしても、俺は歩む道に変わりはないのだ。

所詮、俺は俺でしかないのだと、今なら十分に分かるんだ。

なんてことは、まるでない。

だから、心の奥底に封じた過去を、もう一度だけ、俺の口から曝け出そうと思う。

俺にも、人間だった時があるんだよと。

俺にも、人間を名乗っていた時があるんだよと。

誇れることでも、自慢することでもないのだけれど。

むしろ、これから口を衝いて出てくる内容は、俺の人生——もしくは、俺と言う人間の失敗談とも言うべき、あまりにお粗末で、情けない事柄ばかりだから、恐らく退屈すること申し分ないと思う。

覚悟は、用意しといて損ではないだろう。

俺が、《贖罪の忌み子》たる由縁を。

だから、どうか心して聞いて欲しい。

前置き代わりの言い訳（後書き）

まずは作者の蟬からごあいさつ申し上げます。この物語は、作者のもう一方の作品、『魔王の息子』の主人公、鯨木零士いさなざれいしの過去話になります。ですが、決して別にそっちを読んでなくても、いや、むしろ読まないほうがさくさくとこちらを読み進めていただけるかもしれません。なるべく、読みやすさ重視で書いた物語ですから。

加えて、もしかしたら既に『魔王』のほうもお読みになつてくださった読者様には、少し二ヨ二ヨできる内容になつているかもしれないません。無駄にはらまいた伏線とかを回収できていたり、みたいないな。

ともかくも、是非楽しんでいただければなと心から思います。
では、どうぞ。

ぼく 先生 家族

網膜を突き刺すような眩しさが、目蓋越しに伝わってきた。

「れいし 零士さん」

ぼくの名前が呼ばれる。

「零士さん」

また呼ばれた。

ぼくは閉じていた目の幕をゆつくりと開ける。そこには見慣れた顔。いつもニコニコと朗らかな雰囲気崩さない、誰に対しても敬語を使う、お人好しの、優しい顔。

いさなぎ
鯨木先生。

「また、そんなところで……」

彼がそんな所と言ったのは、ぼくが今いるこのタンスの中。ぼくは、下段の隅にある狭いスペースにすっぽりと、膝を抱えて、暗闇に浸っていたのだ。

「夕飯の仕度が整いましたので、他のみんなを呼びに行ってください」

「……………」

ぼくは無言で頷いてから、のそりと押入れから這い出た。

「お願いしますね」

先生は再度ぼくに頼み込んで、行ってしまった。多分、台所に戻ったのだ。

ぼくは皆を探しに行くことにした。

現代日本に『孤児院』という名前の施設はない。だが、『孤児院』とほぼ同じ役割と概要を持つ『児童養護施設』というものが、存在する。その数はおよそ五百五十前後。この数字が多いのか少ないの

か、先月十歳を迎えたぼくにはあずかり知らぬことだが、ぼくが身を寄せているこの『くじら園』もまた、その数ある施設の内の一つだということだ。

周辺民家はあまりなく、裏に手入れのなつてない雑木林を控えるここ『くじら園』は、けっこうな広い敷地面積を持つ、木造建築の二階建ての洋館で、言っちゃあなんだが、かなりボロがきいている。外観は、築五十年を越すといわれる歴史を感じさせ、全体的にセピア色だ。先週、ぼくが薊姉ちゃんとキャッチボールをしていた際に割ってしまった二階の窓ガラスがそのままになっている。この間、雨が降った時にも、二階の廊下の隅で天井が涙を流していた。

元々は、鯨木先生のお祖父さんが戦後に建てた屋敷だったらしく、それを受け継いだ先生が、ここに、今の『くじら園』を開いたらしい。

「アキラ、見つけ」

園の敷地内に君臨する、見るも巨大な桜の幹の上に、二つ年下のアキラを見つけた。

アキラは高い所が好きで、何かと高所に登りたがる傾向があった。何でもアキラの両親は、住んでいたマンションの屋上から、二人揃って仲良く飛び降りた、らしい。それもアキラの目の前で。それ以来、アキラは何故だか、やたらと高い場所に行きたがるようになったのだとか。

屋根の上や電柱なんかはもっぱらで、たまに銭湯の煙突の上に登ったりなんかもする。最近、この桜の天辺付近の高みがお気に入らしく、そこで転寝しているのをよく見かける。

「アキラー、他のみんな見なかったー？」

俺はアキラを見上げて、言う。伊達に高所に居座っているわけでもないだろうから、他の子達の動向を見ていたのではないかと踏んで、アキラから初めに探し当て、訊いたのだった。

「裏庭に三人。林の方に五人。一人外へどっかいった。残りは中にいるはず」

アキラは必要以上の言葉をあまり用いらない。いつでも最低限の単語しか口にせず、進んでコミュニケーションをとりたがるような奴でもなかった。

「そか。分かった。あんがとなー」

アキラにそう礼を言い、飯だから早く降りて来いよーとだけ付け足して言い残し、まずは林の方に遊びに行った奴らと呼び戻すことにした。

この四年後、この桜が満開を迎える春に、自分は同じくこの桜の太い枝に座るアキラと並んで腰を下ろすことになるのだが、

「父さんと母さんが、あんな安らかな顔で逝った景色を、おれは見てみたいんだ」

と、前置きもなしに呟く彼の独白を聞くことになる。

「いつか、見れたらいいな」とその時の自分は考えもなしに言い、アキラは珍しく微笑んでから、「うん」と頷いた。

そしてさらにその三年後、自分が十六、彼が十五の歳を数える頃に、アキラはまるで仏のような満ち足りた笑顔で、歓喜するように笑い上げながら、学校の屋上から飛び立つことになるのだが、この頃の自分は、まだ何も知らない。

広い玄関の近くに設置された、蛇口が五つある共同の洗面所で、ばしゃばしゃと数人の男児が手洗う。

「外で遊んできた奴は、石鹸で手え洗えよー」

へーいだの、ほーいだのと可愛げのない返事をする年下連中を、順番に食卓に送り出す。まるで羊を柵に追い込むボーダーコリーのようだと思った。

「れーいしい、今日のゴハンはー？」

ぬらーり、と背後から不意打ち気味に薊姉ちゃんあざみが、ぼくに抱きついてきた。腰まで届く真っ黒な長髪が鼻にかかってきて、少しくすぐったかった。

「シチューだつて。あとサツマイモを混ぜ込んだ食パン」

くじら園では、パンの類は自家製だった。これは鯨木先生の趣味。レッツホームベーカリーである。

「あらやだ。早く端っこ確保しなきゃ」

焼きたてのパンの耳ほど美味しいものはないと豪語する薊姉ちゃんは、大の端っこスキーなのである。

くじら園では、俺より年上なのが二人だけしかない。その内の一人が薊姉ちゃんあざみで、確か今年で十七歳になる花の女子高生なはずなのだけれど、見た限り彼女が学校に登校している姿をぼくは見たことがなかった。

日差しをあまり浴びたことのない白い肌に、びっくりするくらいに長い黒髪が、某二次元の向こう側から這って現れる呪いのビデオ的な彼女に似てなくもないので、年下連中には一部怖がられている節もあった。

「しつちゅー、しつちゅー」

と鼻歌気味に薊姉ちゃんあざみは踊るような足取りで食卓に向かった。

ぼくもそろそろ向かおうとして、ふと、玄関の三和土に、小さな人影がこっそりと入ってきたのが視界に映った。

ぼくが玄関口まで近寄ると、もたもたと靴を脱いで背中を見せていたのはジェウだった。三つ年下で、おかっぱ頭の口数の少ない子である。

「遅かったな、ジェウ」

「あ……」

ぼくが声をかけると、ビクツと肩を揺らして、こちらを恐々と振り返り見る。何だよ、その反応は。

「……ん、何だ？ どっかで転んだのか？」

ジェウが着ていた可愛らしい水玉のワンピースには、所々に泥や埃が付いていたりして、晒された細い二の腕にはかすり傷らしきものもあった。

「え……あう……」

戸惑った風に視線を泳がすジェウ。どうやら言葉の意味がうまく伝わらなかったらしい。何故だか、ぼくが怒っているように受けとってしまったようだった。

「ジェウ、どこかで、ころんだ？」

俺はしゃがみこんで、ジェウと目線を同じ高さにしてから、もう一度だけゆっくりと噛み締めるように言ってみる。

ジェウは何度が瞬きしたあと、こくり、と頷いた。

どうしてか、その瞳は軽く潤んでいた。そのかすかに潤む涙目を見つめながら、俺は努めて二カツと笑い、ジェウのおかっぱ頭を撫でた。

「そつか。じゃあ、傷口を軽く水でゆすいでおいで。すぐに消毒してあげるから」

意図が伝わったのかは定かではないが、ジェウはまたこくりと頷くと、早々に靴を脱ぎ、とてちてとてちてと小走りに洗面台の方に向かった。

廊下の先にある食卓へと続く開け放たれたドアの彼方から、唾液腺を刺激するシチューの匂いと、香ばしいパンを切り分ける薊姉ちゃんの声がした。

ぼく あいつ 出会い

「なあなあ、このゲームでさあ……」

「ああ、ボス戦だとこのアイテムで……」

「今日塾でアニメが見れなくてよー……」

「ああ！ そのヘアピンかわいいなあ……」

「ねえ、こないだ買ったこのワンピースんだけど……」

「KENとRIKUがすぐくカッコよくてえっ……」

机に顔を伏せていると、嫌でも教室内のざわめきが耳につく。

ああ、くだらないくだらない。実にくだらない。ゲームの話。アニメの話。ファッションの話。アイドルの話。すべてが果てしなくどうでもいい。くだらない上につまらない話題を毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日繰り返して、いたい何が面白いというのだろう。不可解かつ不愉快だ。ぼくの不快指数が上限に達しようとしている。

むくり、と伏せていた顔を上げる。一瞬、クラスの空気が固まり、視線の全てがぼくに集まるが、ぼくは舌打ちだけを残して教室を出た。

昼休みという長いのか短いのか微妙なこの時間帯を有意義に過ごす為の高等スキルをぼくは残念ながら持ち合わせていないので、大体はさっきのように自分の机に伏せて昼寝というものを試みてみた。校舎内をフラフラと方向も定めず彷徨してみたりするのだが、まあ、他に強いてあげるとすれば、図書室に入り浸っているくらいである。

そして今日も今日とて、例よって例の如く、再度仮眠を貪るにはいささか興が削がれてしまったので、ぼくは図書室で静かに活字の海に溺れることにした。

ぼくは案外読書家なのである。

いや、まあ。本というのは金のかからない上に加えて、極めて手っ取り早い現実逃避の方法だからだ。

読書に没頭している間だけ、息苦しい現実から目を背けられる。

そしてぼくは物語の主人公になって、怪物と闘ったり、事件のトリックを見破ったり、ハラハラドキドキの冒険を体験したり出来る。

柔らかな木漏れ日の中で、儚い泡沫に身を沈めていくような感覚だから、本を読むことは好きだった。

「……ステイブン・キング。アガサ・クリスティー。三島由紀夫。それにニコライ・オストロフスキーって……相変わらずこのラインナップが意味不明だな。明らか小学生に読ませるようなもんじやないだろ。青い鳥文庫でも置けばいいのに」

とぼやきつつも、ぼくは夢野久作の『瓶詰め地獄』を手に取る。えーと、この前はどこまで読んだっけ、と文庫本をパラパラと捲りながら、机と椅子が密集する読書スペースの、窓際の一番端の席に腰を下ろす。ぼくの指定席。薊姉ちゃんほどではないが、ぼくも端っこが何となく好き。

図書室の窓からは、黄色く点々と芽吹いた金木犀が覗けた。くすぐったくなるような甘い匂いが、風に乗って優しく室内を満たす。

風でページが捲れる。

前髪も乱れて、目に掛かった。ぼくは鬱陶しく手でかきあげ、そして、

なるかみちくま
鳴神千曲。

確か、そんな名前だった気がする。

テーブルを二つ挟んだ距離の席に、ちょうどぼくと対角線になるように座っていた。

静かに目を伏せて、手元の本を読んでいるようだった。見たところ、今はあのウサちゃんはお供に従えていないようだった。

実際に測れば2・5以上はあるんじゃないかとささやかに自負しているぼくの視力によれば、彼女が読んでいる本のタイトルは、お

そらく『変身』と書かれていた。

すぐにぼくは、うげえと思った。若干小学四年生の女の子がカフカを読んでいるだなんて異常な光景を、ぼくは自分のことを棚の最上段に上げて、にわかには信じられない思いで窺っていた。絶対、精神構造がオカシイに違いない。ガキは黙って『グリとグラ』でも読んでりゃいいのだ。カステラの回で涎でも垂らしているという話である。

「……………」

「……………」

あ。

目が合った。

合ってしまった。

ぼくは呪いでもかけられたみたいに固まってしまい、眼球の動きさえも、ままならない状態になる。

何故？

問うまでもない。

二つのテーブルを間に挟んでいるにも関わらず、ぼくは彼女の瞳をととても間近に感じていたからだ。

肉迫、とも言えるかもしれない。

瞳の虹彩も、収縮も、全てが手に取るように近かった。

「……………」

「……………」

互いに見つめ合ったまま、幾ばくかして、すつ、と彼女は視線を本に戻し、すました顔で読書を再開した。ぼくはまだ硬直が解けるまでに時間が掛かった。その後、ぼくもまた本の活字を追おうとしたが、てんで頭に入ってくる気配はなかった。

多分、今までで最も長い昼休みだった。

鳴神千曲についてのプロフィール及び考察。

静寂。物静か。言葉を発しない。過去に記憶しているだけで聞いたことのある言葉。『はい』『いいえ』『分かりません』の三つ。あとは国語の時間での朗読くらい。でもあれは文を読み上げているというより、ただ音を放っていると表現した方が適切かもしれない髪型はおさげ。ツインテール。セーラームーンはとくの昔に終わりました。よく、くたびれたウサギのぬいぐるみを連れている。小耳に挟んだ益体もない噂話によると、どうやら家はかなりの金持ちらしい。毎日、黒いリムジンで送迎されているのを、ぼくも見かけることがある。そんな『お嬢様』が何でこんな辺鄙で面白味もない公立校にいるのかは謎だが、まあ、気にしないでおく。とりあえず花輪くんみたいなものだろうと、ひとまずは理解しておこう。はいベイベー。

そして特筆すべきは、彼女には友達と呼べるべき存在が皆無であるということだ。いや、これは本当に。誰かと二言以上言葉を交わしている場面なんて見たことないし、いつもただ無表情かつ無感動に自分の席で読書に勤しんでいるだけ。

友達を、まったくまるで必要としていない。

俺と同じ。

友達はいらない。だが、勘違いしないでくれ。ぼくは別に人間嫌いの厭世家ではないので、孤独は感じるし、寂寥感も身に染みる。ただ、友達という存在が必要ないと思うだけなのだ。だってぼくには家族がいるから。妹がいて、弟がいて、姉がいて、兄がいて、鯨木先生もいる。だから、寂しくない。故に、友達はいらない。

だが、一つだけ違うとすれば。

彼女という存在は、クラスの中で浮いているというよりも。逆と
いうか。

そう、沈んでいる。

誰も知覚しない。何者にも認識されないくらいに。
沈んでいた。

空気というか、幽霊みたいな。

空気がなくなれば、一瞬で誰もが気がつくけど。

幽霊は元々いないようなものだから、いなくなっただって誰も気づきやしない。

そんな感じ。

そんな存在。

ぼくに至ってはその反対。

ぼく自身が空気であるが故に、ぼくが動けば空気も動く。皆が一斉にぼくの挙動を注視する。本当。うざったいっただらありやしない。先々週教室の窓を全部叩き割ったことがそんなに珍しいことなのか。全国区で見ればよくあることだろう。窓を割るくらい。それとも何か？ 今度は自分があ窓のように粉々に粉碎されとも思っているというのか。ふんっ、くだらない。ぼくを怒らせるようなしなれば、鯨木湊士という人間は至って人畜無害だ。平和主義の鏡と称してもいい。

だからさあ、くどいようだけど、言わせてくれよ。

どうか、ぼくを怒らせないでくれ。

「……………ジエウ？」

下校中。いつも通りかかる神社がある。そんな広くもない境内。遊具も何もない。どんな神を祭っているのかすら定かではない。苔むした狛犬と、銀杏と楓の木が、秋には鮮やかなカーペットを大地に敷く、何の変哲もない普通の神社。よく近所の子供が、自然と溜まり場としている場所。

そこで、あちこちボロボロなランドセルを背負ったぼくが目撃した、光景。不意に、聞こえた、幼稚で、稚拙な、しかし、何よりも残酷な、罵声。

「ちよーせーんじーん！ チョン公は北にカエれよ」

「日本に住んでんじゃねーよ」

「どうせお前も、フホウニユウコクシャだろがよー」
ジエウ。

蹴られてる。ジェウが、蹴られている。うずくまり、頭を守るように抱えて、何度も何度も蹴られるように蹴られている。一方的に、あまりに一方的に。ジェウは三人の少年らに暴力を振るわれていた。

「……………」

いじめたな？

ぼくはランドセルを投げ出し、歩き出す。

ぼくの家族をいじめたな？

だんだんと緩急さをつけていき、ぼくは既に駆け出していた。

ぼくの妹をいじめたな？

心臓の血流が激しさを伴う。ユルサナイ。頭にふつふつと血が上っていくのが分かった。ヨクモボクノカゾクヲ。理性がドロドロに融解していくのを感じた。ボクノイモウトヲ。もう、ぼくの中でスィッチは押されてしまった。

「ああああああああああああああああああああ！」

ぼくは三人の内の一人に思いつ切りぶつかってやった。突然のぼくの乱入及び体当たりによって、地面に倒された奴の上に、ぼくは馬乗りになって、鼻面めがけて拳を振るった。拳が前歯に当たって皮膚が裂けた。だけど気にしない。それより先に相手の前歯が砕けたからだ。まだ乳歯だったのかな。それでもぼくは満足する。苦痛に歪む相手の顔が見れて、ぼくは狂喜している。

「ああっ！ こ、こいつ四年のキチガイだ！」

呆然としていた一人がようやく状況をそのミニマム脳味噌で理解し始めたらしく、ぼくのことを不躰にも指差した。ああ、親の顔が見てみたい。

キチガイ？ ふざけるな。

頭がオカシイのはお前らだ。

「この、やろっ！」

残った二人が、只今絶賛ぼくがタコ殴りにしている奴の救出に乗り出して、肩を掴んで、後ろにぼくを引き倒した。

ジェウ。

奴らからの理不尽な暴力から解放され、涙にぬれた顔でぼくを見ていた。

悲しそうに。

途方もなく悲しそうに。

ジェウ。いいから。

今の内に、早く行けよ。

逃げろよ。

「この、キチガイ！ おれら五年に敵うとも思ってたのかよ！」

「ナマイキなんだよ！」

いいんだ。ジェウ。行っても。ぼくの行為を、無下にするのか。

お前は、賢い。お前は、聡明だ。ぼくのことを酌んでくれるはずだ。理解してくれるはずだろう？ お願い。いい子だから。ぼくの気持ちを踏みにじらないで。一人で立てるよな？ そう、立つんだ。立つて、走れ。どこまでも逃げろ。家に帰るんだ。よし、いいぞ。立ち上がったな。ほら、いつまでもボサツとぼくを見ているんじゃない。見てたって面白いわけじゃないだろう。早く行けよ。早く早く速く！ そう、それでいい。一人で走れたな。えらいぞ。あとでぼくは分のおやつをあげよう。怪我した箇所には絆創膏を張ってあげよう。寝る前のお話もしてあげる。だからぼくが帰るまでには泣き止んでろよ。悲しい顔なんてしてたら怒るぞ。ぼくは怒るぞ。

だから、大人しく家で待ってるんだ。

ぼく ジェウ 事情

カナカナカナカナカナカナ……と、蝸の声が寂しく境内に木霊していた。傾いた太陽は、紅く世界を照らし、ぼく自身も、鼻血やら何やらで赤黒く汚れていた。神社の中心で仰向けに大の字を描くぼくの姿は、さぞびっくりするくらいにアホらしいであろうことは大いに自覚している。

散々、袋叩きにされて、大した抵抗も出来ずにいたぼくは、自分でも嫌になるくらいに情けなかった。やっぱりマウントをとられちゃうと手も足も出ないや。

「あつ……っ——がつ——」

笑おうとしたけど、声が出なかった。喉に砂利が張り付いてうまく発声出来なかったのだ。というか咽る。あと口の中が切れていて、顎を動かすのも辛い。

自嘲することすらままならないなんて。

これほど、笑えることはない。

「何がそんなに可笑しいの？」

別に。何も可笑しいことなんてない。

「そう。滑稽ね」

ああ、そうだろうとも。

「そして、なんて哀れなのかしら」

ああ、うるさいな。何だよさつきから。気持ち良く茜空を仰いでいたぼくに戯言を降らせてきて。というか何で、お前がここにいるなるかみちくま。
鳴神千曲。

「あなた、酷い顔」

クスス、と伏目がちな目を細めて肩を揺らす彼女。相変わらずのツインテールに、フリル付きのドレスチックな白いワンピースを着ていて、相棒であるウサギのぬいぐるみを、両手でぎゅっと抱擁していた。

傍目から見れば人形のように愛らしい少女。もしくは、少女のように愛らしい人形。どちらで表現しても遜色ない、そんな人間味の薄い雰囲気、鳴神千曲にはあった。

いつからいたのか、どこから見物していたのか。彼女の存在は前振りなくぼくの視界に入り込んでいた。寝転がったままの逆さまの世界で、彼女は神社に遣える献身的な狛犬達（口を開けたほうが阿で、閉じたほうが吽だったか）の真ん中にいて、ふと近付いてきたかと思うと、先刻からぼくが見上げていた空への景観を邪魔して、他愛のない虚言をぼくに落としてくるのだ。

曰く、君はそれで何かを守ったつもりなのか。

曰く、守ったとしてもそれは、君にとっていったいどれだけの価値があるのか。

曰く、獣に首輪を嵌めるように、怒りには錨を下ろすものであり、君の中の怪物は、いずれ君を破滅へと導き、そして君自身を喰い尽くすものであると。

最後の方の、警告なのか忠告なのか分からない呟きだけは、これからプレゼントの包みでもあけるかのように、どこか楽しそうな歳相応の少女の声音だった。

不思議と、寒気がした。

だから、ぼくはいい加減そろそろ起き上がって、帰宅することにした。切れて血の滲む口元を軽く拭い、神社から立ち去ろうとする。鳴神の視線が背中に絡みつくように向けられたままのを承知で、ぼくは振り切るように駆け出した。

最後にぼくの鼓膜がとらえた、鳴神の不気味なクススという微かな笑い声は、どうか空耳の気のせいであって欲しいと、ぼくは走りながら思った。

孤児院での部屋割り、当然男女と共に性別で別れている。玄関

を抜け、まっすぐ右に進んでいくと、廊下沿いに扉が四つ。途中の階段を登って二階に上がると、同じように扉が等間隔で四つ連なっていて、そこがぼくらの寝床である。二階が女で、一階が男である。ちなみに各部屋には二段ベッドと勉強机が設置され、必然的にルームメイトとはツーマンセルであった。

そこで現在。ぼくはジェウの擦り切れたひざを消毒したり、血の滲む腕にバンソウコウを貼ったりしてから、自室に招き入れ、ジェウから事の次第を聞きだしていた。ジジョーチョウシュ、というやつである。

二段ベッドの、薄暗い下の段で、向き合うぼくら。ぼくは何とかジェウの口からポツリと零れた重要なキーワードを拾い上げる。

「猫？」

ぼくが聞き返すと、ジェウは涙目でコクリと頷いた。いや、だから何で泣くんだよ。怒るぞ。

「ハンカチ、やるから。ふきなよ」

ポケットからしわのよった白い無地のハンカチをジェウに押し付ける。ジェウは静かに受け取り、目元を拭った。

「つまり、あの神社に捨て猫がいて、ジェウは毎日その猫の面倒を見ていた、と。それで今日、あのゲス共からまれた、と」

なるほど。そういえば、ここ最近ジェウは一人での外出が多かったし、実はある日こつそりと残飯を漁っている場面を目撃したこともあったりした。ひそかに不審に思っていたのだが、あえてジェウにその行動の真意を問うことはなかった。隠していたいことなら、隠したままでいいし、共同生活とは言え、個人のプライバシーに関わる問題なら、考えなしに踏み込めばとんだ惨事になる。それは経験上よく熟知していたし、何より自分だって他人に言えないことの一つや二つはあるからだ。

しかし、こういった事情になると。

「猫、ね。鯨木先生に相談すれば、なんとかなるんじゃないか？」
ぼくがそう言うと、ジェウはぐずぐずと顔を俯かせた。どうした

？ 言つてごらん、とぼくはなるべく優しい声音を出した。

「大丈夫。ここには、ぼくしかないよ。ジェウが話すのを、誰も笑つたりしない。だから、安心して喋つていい」

ジェウはオドオドとまごつくように身じろぎしてから、ようやく、
「……………あ、あし、あたし、いいいまし、た。せんつ……………せ、せいは、だめといいまし、した。だか、らあ、あたしは……………」

「そつか。鯨木先生は飼つてはいけないって言つたんだね。それでも、ジェウは猫のことが気になって、ずっと世話を見てきたんだね」
ジェウは涙ぐみながら、コクコクと首を上下させた。

「ジェウは、優しいな」

ぼくはジェウの愛らしいおかつぱ頭を撫でる。ジェウは、ほつとしたように顔を嬉しそうに綻ばせた。なるほど。こうすれば笑うわけね。うむ。今度からいっぱい撫でてやろう。

「でも、困つたことがあつたら、すぐぼくとかに言えよな。黙つて抱えこんだままじゃ、だめだ」

じつとぼくの言葉に耳をすませるように、ジェウはしばしばくの目を見て、やがて力強く頷いた。

ぼく 彼女 理解不能

「何を読んでいるの？」

「見ればわかるだろ。猫についての本」

「ふうん。君が、猫の生態について興味があつたなんて以外ね」

「うるさいな。あっちいけよ、鳴神」

「私がどこにしようと思手でしょ」

「だったら、ぼくにかまうなよ」

「私がどこで君をかまおうと思手でしょ」

「それはさすがに勝手過ぎるだろ」

「というか自由奔放である。なんとはた迷惑な。」

放課後。ぼくは図書室により、猫について色々と知識を蓄えていたのだが、まるで地縛霊かなにかのように、既に図書室には件の鳴神千曲がデーと居座っていた。まあ、昨日の今日ではあるが、だからといって気にすることはなかったのだけれど、当の本人がこちらに干渉してきたのだから驚きであった。

「猫、飼うの？」

「そんな、感じ」

別に彼女の問いに対し、一々律儀に返答しなくてもよかったのだが、慈悲深いぼくはちゃんと答えてやる。ああ、なんて優しいぼくが、あの神社で？」

「……………」

こいつ、何をどこまで知ってやがる。

「これから、昨日の神社に行くんでしょう？」

「……だから何だよ」

「私もついていくわ」

「だから何だよ」

「理由が必要？」

「それは是非とも」

「君のことが好きだから」

「は？」

「冗談よ」

そう言っただけで鳴神は立ち上がり、あつげにとられている俺に、不敵な笑みを向ける。

「何を愉快なアホ面でばけっとしてるの？ さっさと行きましょ」

「……………コノヤロウ」

チクショウが。おちよくりやがって。

結局、理由についてははぐらかされてしまったわけだが、大いに心かき乱されたその時の俺にとって、そんなことは既に瑣末事として三角コーナーに追いやられ、今はこのいけ好かない女子にどう復讐してやるうかという事柄で頭でいっぱいだった。

一年生であるジェウは、四年のぼくと違って時間割が必然的に早く終わるので、先にこの神社で待ってもらうことにしたのだ。ぼくはまた昨日のバカ共がたむろしているのではないかと危惧していたのだが、どうやら杞憂に終わったらしい。

ジェウは、入り口の鳥居のところで膝を抱えていた。

「ジェウ」

「——レイ、さん！」

ジェウがぼくの姿を認めてから、背後の鳴神の存在に気づき、さっと怯えたようにぼくの影に隠れた。

誰ですか？ とチラリと目で訴えてくるジェウ。

「心配しなくても大丈夫だよ、ジェウ。こいつはいないものとして思えばいい」

「私の存在を無視しようだなんていい度胸ね、鯨木くん」

「いやいや、了承した覚えもないのに、本当についてきた鳴神さんの図々しさには負けるよ」

「それほどでもないわ」

「つつこまないからな」

さっそくスルースキルを存分に発動させたぼくは、鳴神からジェウに視線を移して、猫のどこまで案内して、と頼んだ。ジェウはぼくの手を引き、神社の本殿である建物の裏手に回り、林が生い茂る日がまったく差し込まない場所へと連れてきた。湿っぽく、ぶんぶん蚊が数匹飛んでいた。黙って後から追隨してくる鳴神は少し嫌そうな顔をした。普段孤児院の裏山で泥まみれになっても遊びほうけているぼくらは違って、お座敷遊びしか知らないお嬢様には、さぞ似つかわしくない場所であろうな、とぼくは内心ほくそ笑んだ。ざまあ。

「これか、ジェウ？」

縁の下の辺りに、閉じられたダンボール箱があった。特別『拾ってください』とも何とも書かれていない、普通のダンボール。例え見つけたとしてもただのゴミかと思って通り過ぎてしまふかのような存在感の薄さ。しかし、耳を近づけてみると、微かにみゃーみゃーと鳴き声がした。そっとフタを開いてみると、そこには生後間もないと思われる子猫が二匹、やんちゃそうにこちらを見つめていた。毛色は、トラジマと黒毛。ぼくが図書室で得た事前知識によれば、目は開いているし、箱の中で歩き回っていることを鑑みて、生まれて五週間ぐらいは経っているかなと推測。ふむ。

しかしてその瞬間、俺の中で目の前の猫耳をモフモフしたいという衝動が猛烈に沸き起こった。なんか、無性にいじりたくなつたのだ。

なので、さっそくモフモフしてみる。

…… ああ、至福。

という訳で、ぼくは何と猫耳フェチということがここで明らかになった。いつか、猫耳の生えた人種に出会ってみたいものだにゃー。
「あら、可愛い」

鳴神が頼んでもいない感想を漏らす。

「けれど、その見た目の愛らしさは、自らに餌をもたらすよう脅迫しているようにも思えるわ。乳児特有の姑息で卑小な生き方と同じ臭いがするわ」

「うん、お前ちよつと口閉じてろ」

今、理解した。こいつに発言権を与えてはならない。

「名前は何かつけてあるのか？」

淀んだ空気を換気するように、ぼくはジェウに話題をふるが、

「まるで所有物か何かのように名前をつけるだなんて、結局は独占欲という人間の性さがそのもの……」

「だから黙ってるよお前！」

面倒臭えキャラだなおい！

「《名前》に縛られてない君には、とうてい解らないわ」

とまた訳の分からないことを嘯うそぶく始末。うむ、決めた。もう完全スルー体勢を貫こう。

「な、な名前、ない、です……」

「決めてないんだ？」

そう聞き返すと、どうしてか叱られたみたいにしよげるジェウを、ぼくは慌ててなだめにかかった。

それから、散々ぼくらはその二匹を可愛がり、途中スーパーで買った猫缶を一つ与えた。今までは、ジェウが給食の残りとか、家で残飯を与えていたらしいのだが、やはりそれだけじゃ栄養が偏ってきて駄目なのだという。故に、自腹を切って買ったものなのであるが、ふむ。今月のお小遣いの残りがあと数百円とはこれいかにいうか、猫缶高いです。ここは一思いにミルクで済ませてしまえばいいのではないかと思うのだが、与えすぎるとお腹を壊してしまう恐れがあるのだとか。

「しばらくは、ここで面倒を見て、そんでどうするか考えよう」

出費のこととか大問題だが、ジェウは鼻の穴を大きくして首肯した。

「さて、うまくいくかしらね」

鳴神は、飛来してくる蚊を煩わしそうに振り払いながら言った。
いや、本当、お前いつたい何しに來たの？

今日、鳴神のことについては、分かったことより分からないことの方が圧倒的に多かった。

ぼくらが住むこの洋館チックな建物にも、縁側というものがある。その縁側に面した部屋は和室となっており、十枚ほどの畳が敷いてある。皆が食卓を囲む居間と隣り合っていることから、食事が終わればこの部屋でゴロゴロするのが常となっている者も多い。かくいうぼくもその一人であった。

加えて日当たりも一番良く、洗濯物を干す際には、その和室を通じて縁側へと降り、庭の物干し竿に吊るすのである。

さて、夏のうだるような暑さも日が暮ればいくらか治まるもので、俺は干してあった洗濯物の回収が終わり、縁側に腰かけて一息吐いていたところであった。ふう。

「うーん、溲土の膝枕サイコー」

訂正。一息吐かれているところだった。

「……薊姉ちゃん、ぼくはいつまでこうしてればいいの？」

「もうちよつとー」

と言いつつ、かれこれ三十分以上もこの姿勢を維持しているわけだが。

ぼくはサンダル履きの足を外に投げ出し、薊姉ちゃんはそんなぼくの太ももに頭を乗せて優雅に寝転がっている。相変わらずの怖いぐらいに長い黒髪が、まるで膝かけのようにぼくの身体へとまとわりついていた。実際、もしかしたらこの長髪でセーターの一つぐらいは編めるのではないかなと密かにぼくは思っていたりする。鬼太郎のちゃんちゃんこみたく。

薊姉ちゃんは、たまにこうして前振りもなく唐突に絡んできては、ぼくで遊ぶのだ。何故か、ぼくだけで遊ぶ。別に他のみんなと不仲というわけではない（どちらかと言えばむしろその逆である）が、しかし、ぼくに対してだけはペットか愛玩具みたいな扱いなのである。素直に酷いと思うよ。

「おい、遷士い？ 洗濯物は…… って、何やってんだ？」

背後から、紫苑兄ちゃん^{しおん}がやってきた。背が高く、金髪メッシュで、右耳に三連ピアスを装備している一見ヤンキー風味なスタイルだが、実際はとても優しく、何かと頼りになる兄だった。

「薊姉ちゃんに捕まった」

「だろうな…… ってか、寝てんじゃん、薊のやつ」

「あ、ホントだ」

ぼくの膝の上で、薊姉ちゃんは微かに寝息を立てていた。すこぶる安らかそうである。

「どうしよう？」

「ん、起こさねえよにして、遷士は洗濯物もってこい」

「薊姉ちゃんは？」

「そんままほっとけ」

紫苑兄ちゃんはぞんざいに言い放ち、居間に戻っていった。ぼくは言われたとおり、静かに薊姉ちゃんから離れて、山のように詰まれた干された衣類を抱えて紫苑兄ちゃんの後を追った。

ぼく 運命 魔法遣い

翌日のことである。

よくよく考えれば、ぼくは多分、世に言つ変質者に出会つたのだと思う。

ほぼ日課のようになってしまった猫の世話の為、ぼくは放課後になると同時に、ジエウが先に待つ神社への道のりを急いでいた時のことだった。

「見つけた」

そう、初めに声をかけられた。民家が立ち並ぶ居住区の十字路で、ぼくはその人物との邂逅を果たした。

「やっと、見つけた」

その人はまた同じことを言った。

「……おっさん、誰？」

現代っ子らしく警戒心旺盛なぼくは、おまけに敵愾心も剥き出しにして、目の前にいるおっさんに問いかけた。

まあ、おっさんとは言え、フレームのない眼鏡を装着し、髪はオシヤレになでつけられ、こんな蒸し暑い中、子供のぼくでさえ一目で分かる上等な黒いフレアコートに、きちんとネクタイまで締めるという出で立ち。いやはや、見ているだけで暑苦しい。

「ん、わたしかい？ わたしは、君の運命を大きく変える者だよ」

訂正しよう。見てるだけで痛い人になった。

「ふうん。それって今？」

「いや、今は時期じゃない。しかし、いずれね」

ふふふつ、気味悪く笑うおっさんは、ぼくを品定めするかのようじろじろと眺め回した。

「……ふふつ、まったく。《贖罪の忌み子》、か」

「は？」

「いや、何でもないさ」

何から何まで怪しい中年である。ぼくは警戒レベルをもう二段階ぐらい底上げした。もうこの状態になったぼくは、例えば相手が家族の誰かであっても、最初から疑ってかかる即臨戦態勢モードであるガルル。

「それにしても、引き止めてしまつてすまないね。お礼にジュースでも買つてあげよう」

「わーい」

ぼくは諸手を挙げて喜び、子供ながらの純粹さでおっさんの後を付いていき、自販機でポカリを買つてもらつた。せつかくなので、ジエウの分も頼んだら、快くおっさんは承諾してくれた。わあ、なんて良い人なのだろう。変な痛いおっさんだと思つていた自分がバカみたいだ。もっと他人を信じなければいけないと、ぼくはまた新たに学んだのであつた。

「で、おっさんはいつたい誰なの？」

ペットボトルのふたをあけながら、ぼくは訊いてみる。

「さて、ね。しかし、強いて言うなら……」

「言うなら？」

「《魔法遣い》かな」

「嘘くせえ」

げらげらと笑いながら、ぼくは言つた。

「じゃあさ、魔法遣いのオッサン。ぼくの未来はいつたいどうなつてんの？」

冗談半分、茶化し半分で訊いてみると、意外なことにおっさんは真剣な表情で口を開き、ぼくは飲んでいたポカリから口を離した。

「目も当てられないような、悲惨なものさ」

ポカリの甘味が、どこか違和感じみたものになつた。

「哲学的な話をしましょう」

「唐突にそんな話の切り出し方をするお前が既に哲学的だよ」

「私達はどうして子供なのかしら」

「そんなロミオとジュリエットみたいなこと言われても」

「いいえ、きっと何か理由があるはずよ」

「そりゃまあ、まだ十年ぐらいしか生きてないしな」

「すごいわ、その通りよ。君ってもしかして天才？」

「抑揚もなく棒読みで褒められても全然嬉しくないよ」

「変ね。おかしいわ。私の計画ならこのまま世界情勢とケーキの話題になつていくと踏んでいたのだけれど」

「そんな分岐点どこにも見当たらなかったぞ」

「本当、不思議ね」

昼休みの図書室で、ぼくらは何故か席を隣同士にして談笑に毒々しい花を咲かせていた。ここのところ、やけに鳴神は人気がなくなるのを見計らつて、よくぼくに話を振ってくる。それも今のようなとりとめもない、オチのつけようもない話を、だ。相変わらず、相棒であるウサギを従えて。

「というか、世界情勢なんてぼくがいったい何を知っているっていうんだ」

たかが一介の小学四年生に世界の何を語れというのだ。

「あら、去年ニューヨークで起きた同時多発テロについて考察を広げるなんてどうかしら？」

「ああ、それならかるうじて知ってるかも。確か、セカイボウエキセンタービルつてのに、二機の飛行機がぶつかって……」

「そう言えば、最近あの猫元気がしら？」

「話振つといていきなり切るなやあ！」

ホント性質がワリイたちなお前つて！

「そんなこと、私いつさら関心ないもの」

「……なんかもう、お前つて性格が悪い云々の問題じゃないよな、もはや」

「褒め言葉として受けとっておくわ。で、猫はどうなの？」

蚊の出没頻度に嫌気が差したのか、あの日以来、鳴神は神社に来ていなかった。まあ、ジエウも何だか鳴神のことを怖がっていたようなので、ぼくとしては一石二鳥で万々歳。

「んまあ、元気だよ。ぼくの兄ちゃんにも相談してさ、餌代とかもなんとかなってる」

紫苑兄ちゃんに相談して本当によかった。ぼくのお小遣いにも限界があるというもので。いくら感謝してもし切れないほどである。

「そう」

鳴神は自分から訊いておきながら、さして興味もなさげに相槌を打った。頭部にぶらさがるツインテールがなんとも憎たらしい。チクショウ、筆り取ってやろうか。

「ふーん、鯨木くんはあの子の為にがんばってるんだあウサ」

「……………」

鳴神は膝に抱えたくたびれたウサギのぬいぐるみを掲げて一人芝居を始めていた。正直、無表情がデフォルトな彼女がやると、いったいどちらが人形だか分からなくなる。いや、普通に怖い。

「そうね。大した偽善者精神だわ」

「でも、きつとその薄っぺらな善意は思わぬ方向に飛んでいくかもしれないんだなウサ」

「まったくね、ウサ吉」

ぼくは我慢の限界がきて、

「人形遊びなら他でやれよ。読書の邪魔だ」

そもそもぼくは、ここに（暇を持て余して）読書をしにきたのだ。そこへ割って入ってきたのが鳴神なのだった。本当、何でこいつばくなんかに付きまとうんだらう。純粹に謎だ。

「邪魔ですって？ 随分と酷い言い草ね。人権侵害で訴えるわよ」

「何でもいいから、とつとつその人形連れてどっかいけよ」

「ああ、邪険にされるなんて。私はいたく傷ついたわ。ウサ夫、慰めて」

「ウサ吉どこいった」

設定が曖昧だなおい。名前ぐらい安定しておけよ。

「名前なんか、所詮飾り程度で丁度いいのよ。そんなもので、私は縛りたくないから。これは前にも言ったでしょう」

「言ったような気もするな」

「君は……気楽なものね」

「どういたしまして」

ぼくはそこで、先日ひょんなことから出くわした例の変なおっさんのことを思い出した。もうあれから二度と顔を合わせることもなかったが、おっさんの発言にはいやに引く掛かるものがあった。なにやら、これから起こる悲劇をあらかじめ警告しているかのような。しかしほどなくして、その嫌な予感が見事に的中したことをぼくは知る。

それから二日後。

ぼくとジェウが面倒をみていた子猫二匹は、鼻腔から大量の血を流しながら、閉じられた箱の中で静かに息絶えていた。

ぼく カラマーゾフ 宴

家に帰ってもなかなか泣き止まないジエウを薊姉ちゃんあざみは付つきりで宥めているが、部屋の扉越しに聞こえてくるすすり泣きは、未だに治まった気配を見せなかった。

ぼくは一度、居間のほうに戻った。いつもは食卓として活躍している長いテーブルには、紫苑兄ちゃんしおんが席についていた。もうそろそろ夕食の時間になるのだが、紫苑兄ちゃんしおんはエプロン姿でお茶をすすっていた。どうやら一通り食事の準備は出来たらしい。漂う匂いから、肉じゃがらしいことが判明したが、今のぼくには食欲の「しょ」の字もないことは言うまでもない。

「まあ、遷士。座れよ」

ぼくは言われたとおり大人しく席に腰を下ろす。

「事情はさつき大体聞いたけどよ、もう一回だけ詳しく話してくれないか。忘れないうちに、色々とはつきりさせておこうぜ」

「……うん」

ぼくは頷き、これまでのあらましを再度話し出した。出来るだけ、克明に。

今日、いつものようにぼくはジエウと神社で合流し、二人で猫の様子を見に行ったのだ。しかし、そこでぼくらが目にしたのは、変わり果てた猫の姿。大量の血で染まったダンボール箱の中は、尋常じゃないくらいの異臭がした。ぼくは絶句したまま、事態の把握に勤しんでいたのだが、一方のジエウはそれどころではなかった。うるたえ、狼狽し、この世の絶望を一人で背負い込んだように、悲痛な顔でさめざめと泣き始め、ぼくはどうしたらいいのか即座には分からなかった。

「それで、遷士は子猫を近くに埋めたんだっただな？」

「うん」

またぼくは首を縦に振って、その概要もまた説明した。

仔猫たちはそこから近くの藪の中に埋葬した。大量の血と、仔猫が死んだという衝撃にジェウはまともに歩けそうになかったので、ぼくが負ぶって帰路についた。ジェウは他の同学年と比べても小柄な部類で、びつくりするくらい軽かったが、ランドセルを二つ背負うのは流石に辛かった。

「死んでた、ね……まあ、俺は相談受けたからパトロンとして協力してたにはしてたが、実際にその猫を見てたわけじゃないから、何とも言えんが」

「……………」

「そう暗い顔すんなよ、遷士。お前がそうだとジェウまでずっとあの調子だ。まずはお前が立ち直れ」

紫苑兄ちゃんはある案の定敵しい口調でぼくに言った。しかし、ぼくも自分で驚いているくらいなのだが、存外、ぼくは猫が死んだこと自体についてはあまりショックを受けていなかった。ただ、不可解なことばかりが多過ぎて、何とか思考を働かせようと努めていたのだ。その為、紫苑兄ちゃんからは落ち込んだ表情に見えたのかもしれない。

「分かった」

何にしろ、ぼくはただ頷くことしか出来なかったのだけれど。

状況をもう一度整理してみなければならぬ。

ぼくとジェウは仔猫二匹の面倒をこつそりとみていた。

だがどういうわけか、仔猫は死に絶えていた。まずはその死んだ原因を考えてみよう。鼻から血を流して死んでいたわけだが、動物でも鼻血をするのだろうか。でも鼻血による出血多量で死亡というのも何だか妙に滑稽な話である。しかし、果たして実際はどうなの

だろうか。猫には、別に誰かから叩かれたり殴られたりしたような外傷はなかった。いつものようにダンボール箱の中にいて、そこで冷たく固くなっていた。

ならばあと一つ、病気という線はどうだろうとぼくは聡明にもひらめく。あの仔猫たちは元々病持ちで、あの大量の鼻血も病気のせいでそうなったという可能性。うん、それならぼくとジエウに仔猫の不調を見落としていた過失はあるけれど、たかが十歳と七歳の子供に動物が病気かどうかなんて分かる訳がないし、これが世に言う不可抗力というものだろう。よって、ぼくとジエウに多少の責任はあれど、その一件については致し方ないということだ。

「そんな訳ないだろ」

既に放課後となった学校。帰りの起立、礼が終わると同時にぼくは教室を飛び出し、一直線に図書室へと向かった。ガラガラと扉を横に開け、入室する。鼻腔を突き抜ける図書室特有の空気。紙とインクの臭い。知識の香り。受付カウンターで事務仕事に従事している司書の先生を通り過ぎ、几帳面に並ぶ本棚の列を通り抜け、机と椅子が密集する読書スペースに辿り着く。そこが一番端の窓際の席に――詰まるところ、ぼくの指定席にソイツは静かに本のページを捲っていた。

題目は――『カラマーゾフの兄弟』。

「そろそろ来る頃だと思った」

鳴神千曲はひざに下僕であるウサ吉だかウサ夫だかを置き、視線も動かさずに言った。

「鳴神、お前に話がある」

ぼくがそう告げると、鳴神は文庫本を閉じ、ぼくを一瞥した。

「例えば前日まで元気だった仔猫二匹が翌日になってみると鼻から血を流して死んでいました。さて、猫はいつたいなんで死んだのでしょうか？」

「おそらく毒殺ね」

彼女は間髪入れずに平然と答えた。

「毒殺」

聞き慣れない外国語のようにぼくは口の中で反芻する。

「ヒ素、シアン、タリウム、青酸カリ……詳しい成分は検査をしない限り分からないけど、仔猫程度の小動物なら身近にある薬物で事は足りる」

「そこまでスラスラと言えるってことは、まだお前は何かを知ってるな」

疑問系ではなく、断定した口調でぼくは言い放った。

「お前は何かを知っている」

「私は何かを知っている」

鳴神は何を考えているんだか一切読み取れない表情でオウム返しのように呟いた。

「なら、教える」

「別に教えてもいいのだけれど、君はそのことを知った後、いったい何を仕出かす気かしら」

「んなこたあ今はどうでもいいんだよ。知ってるならもったいぶらずさつさと教えるって言ってたんだ」

頼んでんじゃねえ、命令してんだよ。

ぼくは酷く苛立って、荒っぽくテーブルを叩いた。

「暴力的ね。じゃあ教えてあげるわ、スメルジャコフ」

「あんなキチガイじみた無神論者と一緒にすんな」

「というか、動物虐待をしていたのはアイツだろうが。逆にぼくは猫を毒殺した犯人を知りたいんだ。」

「あら、君もこれ読んだの。物好き、というか異常なほどの読書範囲ね。今からそんなじゃ性格歪むわよ？」

「お生憎さま、もう手遅れだ」

それとお前だけには絶対言われたくない。

「……では、教えてあげましょう。君にとってのフォードルを」

いつになく感情の欠落した顔から、珍しく鳴神は徐々に口元を引いていき、何ともその歳には似つかわしくない妖艶な笑みを作った。いや、不釣り合いなのはその年齢だけであって、彼女自身がまとう雰囲気自体には戦慄するほど様になっているのだから始末に終えない。というか逆にぼくの方が圧倒される形になるので困る。ぼくは思わずゴクリと唾を飲んだ。

もしかしたら、ぼくは何か悪魔とでも契約しているのではないだろうか、そんな気がした。

しかし、ぼくは訊かなければならなかった。

「そして、君にとってのイヴァンはいったい誰になるのか」

鳴神は怪しく唇を舐めてから、それらの真実をぼくに伝えた。

鳴神の話が終わった後、ぼくは自分でも驚くほど冷静であること実感した。うん、ぼくはしっかり落ち着いている。無駄な雑念も邪念もない。

だから。

「どこ行くの？」

鳴神は愉快そうに妖美な微笑みを湛えながら、図書室を出て行くぼくに問う。まるで思い通りなっていく戦況を眺める軍師のように。普通に無視してもよかったのだが、ぼくは涙が出るくらい優しいから、律儀にも返答してやる。

「決まってるじゃないか」

宴を始めるんだよ。

「ってかよー、マジであの猫死んじまったなー。バレたらやばくねー」
「バレねーってあんなんで。っーかすげえのはヨっちゃんだよな。」
よく理科室からあんな薬品盗めたじゃん」

「楽勝だっつーのあんな。授業終わったあと、ハゲ山に忘れ物しましたあとか何とか言って入るんだよ。で、あのハゲ、その日の授

業が全部終わるまで薬品棚のカギ閉めねんだ。だから簡単にかっぱらえんの」

「ヨっちゃんよくそんなこと知ってたなあ」

「……お、おう。まあ、ちよつと教えてもらったっていうか」

「でもさ、棚から一つでも無くなったら気づくんじゃね？」

「それはねえって。あのハゲ山だぜ？ 管理も全然ズボラなあいつのことだから、小瓶一つ無くなったってわかりやしねえよ」

「だよな」

「はははははははははは」

ゲラゲラゲラゲラ。

けらけらけらけら。

笑う。笑って。笑い上げる。

ほほう、楽しそうですね。

それは何より。

何が面白いんだか知らないけど。

「つはははは……ああ？」

「は？」

「え、誰？」

三者三様、そいつらは同じアホ面でぼくを見た。

「こおんばーんわああー」

礼儀正しいぼくは金属バットを引きずりながらちゃんと挨拶する。塾帰りなのか、あの神社でジエウを苛めていた三人のゲス共は、こんな夜遅くに近場の公園で菓子パンとスナックの袋を散らかしながら蛆のようにたむろしていた。

全て、鳴神が言っていた通りである。こいつらの行動パターンも、思考パターンも。

低能じみた、嫌がらせ。こいつらは、猫の世話の為、ぼくが毎日のように神社にすることで、溜まり場を盗られたと思った。加えて、

ぼくが突っかかっていったあの日、ぼくは散々袋叩きにされたけど、少なからず相手側だってそれなりの痛手を負った。その負い目もあってか、日頃の鬱憤が相乗効果で増大していき、ついにぼくへの復讐を計画した。それが、仔猫を殺した動機。いやはや、まったくもってくだらない。

でも、ぼくにしてみればそんなことどうでもいいんだ。

感情や感傷なんて二の次でかまわない。

重要なのは、こいつらがジェウを悲しませたということ。ぼくの妹を傷つけ、泣かせたという事実。

宴を始める理由としては、十分過ぎる。

「実はぼくって、ずつごくずつごく慈悲深いことで定評があるんだ。本当ならお前らなんて硝酸か塩酸ぶっかけて殺された猫達の気持ちに味わえ〜とか思ってたんだけど、残念なことにそんな物騒なものはなかったからさ、いつも遊びで使ってるバットで済ませてあげるよ。うん、だから……」

大人しく半殺しにされてよ。

ぼくは手に持ったバットを高らかに掲げた。

ぼく カラマーゾフ 宴（後書き）

自分も、マールゾの兄弟は読んだには読んだのですが、文庫の下巻の初めまで読んで挫折しました。でもアリオーシャ可愛いよアリオーシャ。

ぼく 恐怖 害悪

「おい、聞いたか？ また鯨木がなんかやらかしたらしいぜ」

「あー知ってる知ってる。上級生三人ボコボコにしたってね」

「じゃあさ、その中の一人が市会議員の息子だっていうのは知ってる？」

「え、それは初耳」

「確か、市森っていったっけ？」

「まあ、今回はさすがの鯨木もヤバイんじゃないの、って感じだな」

「だよなー。なんかそのままどっか別の学校行っていくんじゃないかなあ」

「そりゃ言ってる」

「ははははは」

ぼくは教室の扉の向こう側から聞こえてくるクラスメイトの談笑にしばし耳を傾けてから、勢い良く入り口のドアをスライドさせる。そのせいで、先程まで歓談に花を咲かせていた何人かの男子がビクツと反応し、ぼくの方をチラリと盗み見た。ぼくが僅かに睨み返すと、そいつらは怯えたようにそそくさと教室を出て行った。

荒っぽくにランドセルを自分の机に降ろし、慥然とした態度のままぼくは席につく。特別することもないので、それからぼーと窓の外を眺め続けた。

そしていつの間にか時間は過ぎ、教室にいかにも偽善者といった印象の優男の担任が無駄に明るい挨拶を振りまき、予定と連絡事項を知らせるだけの退屈なホームルームが始まる。それらを軽く聞き流し、最後に礼が済むと、案の定、担任はぼくを呼びつけた。無論、ぼくは全て承知しているので、大人しく指示に従う。

「えと、鯨木。あとでちよつと職員室に来てくれないか」

「はい」

ぼくが素直に頷くと、担任は困ったような、少し疲れたような愛想笑いをした。こんな問題児を自分のクラスに抱えているのだ。多

少々なりとも彼に同情の念が湧いてこないでもない。

何となく鳴神の席に視線を移すと、彼女は相も変わらずウサギのぬいぐるみを膝に乗せ、熱心に読書をしていた。文庫本にはカバーがしてあって、タイトルは分からなかったが、きっと前のカラマーゾフみたいになんか難しく、頭の痛くなるような内容の本に違いない。加えていつも通り、鳴神がいる半径一メートルの空間は、台風の目みたいに静かで、異質だった。

そしてぼくも、いつも通り異常なのだった。

その日の流れについては、ぼくも意気揚々と語れる類のものではないので、おおまかに割愛させて貰うけど、あしからず。

ぼくは前述の通り、一時限目から授業を受けずに、職員室に召喚され、とりあえずは確認の為か、担任から事のあらましを訊かれて、ぼくは無意識に無機質な声音で、淡々と事の次第を説明した。いや、説明といっても単に二言程度呟くだけで事は足りた。

昨夜、ぼくは五年生の三人をバットで殴り、怪我を負わせました。ただそれだけです。

「い、いや、ただそれだけって言われてもなあ……」

担任は再度困り果てたように、曖昧な苦笑いを漏らした。

その後、今度は校長室にまで連れて行かれ、そこで頭部の薄い教頭と、反対にフサフサな白髪を湛えた校長と対面し、再び事情を語らねばならなかった。ぼくはもう一度同じ内容の説明を繰り返した。「鯨木くん。では、君が彼らにそこまでした行為の動機は、いったい何なのかな」

イライラとした風に声を荒げようとした教頭を押しとどめて、校長が冷静な態度でぼくに言った。ほお、とぼくは思った。どうやらこの人間は、周りの大人と比べて、幾分かマシな人格をしているらしい、とぼくは校長の評価を改めた。今度から校長の長い話にも少

しは耳を傾けてやろうかな、と気まぐれに思った。多分、明日にでもなれば忘れている程度の決断だ。

それで、ぼくはあのクス共が理科の準備室から薬品を一つくすねたのだという事実を告げた。その劇薬で、仔猫を二匹毒殺したとも。校長はすぐに理科担当のハゲ山を呼び出し、事実確認を急がせた。

それからしばらくして、随分と後退しているデコを光らせたハゲ山が、薬品リストと校長の顔色を窺いながら、渋々とその事実を認めた。ぼくは営々と動き回る大人達の様子をぼんやりと観察しながら、別のことを考えていた。

鯨木先生は、果たしてぼくに何て言うだろうか、と。

「君がタコ殴りにした三人は、めでたく病院送りになったようだけど、君はこれで満足したのかしら？」

今日はもう帰りなさい、と担任からのお達しがあったので、給食だけをありがたく頂いてから、少し早めの下校を許された。

その他諸々の面倒な手続きは、また後日ということらしい。

「本当、面白いように動いてくれるわよね、君って」

従って、時間を大いに持て余したぼくは、こうやって正規の帰り道を外れ、気の向くまま風の吹くままに任せて道草を食っているのである。当てもなく彷徨い続け、どこかの住宅街の中にポツンと設けられた申し訳程度の小さな公園に何故か辿り着き、どうしてかブランコに座り、ただぼんやりとしながら揺れていた。ああ、今日も空が高い。

「いい加減、何か言ったらどうなの？」

「……………」

それもそうだな、とぼくは思い、これまで完全無視を貫いていた姿勢を崩して、目の前にいる鳴神に今初めて視線を向ける。

「なんで、お前がいるんだよ」

「私も、学校を抜け出したからよ」

当然でしょ？ と彼女は無理矢理作ったような微笑みを浮かべ、空いている隣のブランコに腰かけた。無論、例のウサ吉は抱いたままである。

「いいご身分だな」

「君ほどじゃないわ」

抑揚がなく、感情というものがいつさら含まれていない声音で、鳴神は言う。ぼくは思いつき舌打ちをして、自分の隣を睨みつける。しばしの間、ぼくら互いに静寂を保っていたが、先に痺れを切らしたのは勿論のことぼくの方だった。

「お前は、なんでぼくに付きまとうんだよ」

「理由が欲しいの？」

「ああ、是非ともね」

鳴神は片手でブランコの鎖を掴み、もう一方の手でウサ夫を抱えて、ギイコギコ、と能面のような無表情でブランコを揺らし、

「……その内、分かるわ」

そう呟いたつきり彼女は黙々とブランコを揺らし続けた。なんだろう、楽しいのだろうか。

「今、教えるよ」

ぼくは脅すように語気を強めるが、鳴神は至つてどこ吹く風といった感じに、倦怠気味な流し目をぼくをよこすだけだった。

その反応にぼくは無性にムカツときて、そうかよつ、と吐き捨てながらも乱暴な足取りで公園を出た。今度は、鳴神も付いてこなかった。

本当、壊したくなるくらい腹の立つ女だ。

ぼくがそのままいつもより早く自宅に帰還すると、居間で鯨木先生が一回り老けたように疲れ果てた様子で、静かに珈琲をすすっていた。ぼくは何故だか緊張して、自らの帰宅を告げた。

「た、ただいま戻りました」

「……………ああ、濤土さん。おかえりなさい」

三十代後半の、中肉中背——いや、どちらかと言えば線の細い人だった。歳の割にはかなりの童顔で、時折紫苑兄ちゃんとは兄弟と間違われることもしばしばあり、いつだって彼の周りには穏やかな空気が流れていて、柔和な笑みを常に絶やさず、誰に対しても敬語を使い、みんなからは『先生』と呼ばれ大変慕われている。

みんなの、お父さんだった。

「どうしたの、ですか」

ぼくも同じく、鯨木先生に対しては自然と敬語を用いている。昔から、そうだった。ぼくが、この孤児院に棄てられた時から、ずっと。

「いえ、なんでもありません」

目頭を軽く揉んでから、先生は居間の入り口で突っ立っているぼくに笑いかけた。

「濤土さん、こちらに来てください」

ちよいちよいっと、猫のように先生はぼくを手招きした。ぼくはその言葉に従い、先生にゆっくりと近づいた。

ぼくの中で、じつとりとした恐怖が込み上げる。学校で職員室に呼び出されるよりも、教頭や校長といった大人達に囲まれるよりも、何倍も、何十倍も、怖かった。

「どこか、痛いところはありますか？」

先生は、どこまでも優しい声音で問いかけた。

「……………あり、ません」

妙に息苦しくなった気がして、言葉を紡ぐのが急に難しくなった。「では、この切れた手は痛くないのですか？」

先生はぼくの手を取り、そのかさぶたに覆われた傷口を見つめた。あの日、例の三人からジェウを庇った際に受けた怪我だ。別に、大したことはない。ただの、傷だ。

「ない、です」

「それなら、いいんです」

あなたが、健やかでいてくれれば、と鯨木先生はぼくの頭を愛おしそうに撫でた。何度も何度も、包み込むような温かさと、柔らかさで。

「……め、んなさい」

「なんですか、澪土さん」

「ごめんな、さい」

ぼくは、鯨木先生のそんな優しさが、心底恐ろしかった。

ついには耐え切れなくなって、他に何を言うでもなくリビングを飛び出すと、廊下の壁に寄りかかっていた紫苑兄ちゃんと出くわした。人目を惹く金髪メッシュに、片耳だけの三連ピアスはいつもと同じく、ジーンズに灰色のパーカーという出で立ち。そしてどうやらぼくのことを待っていたようだった。

「澪土、ちよつといいか」

今日は幾度となく呼び出される日だな、とぼくは内心自嘲しながら、紫苑兄ちゃんに案内されるまま歩き続けた。各自の部屋が連なる一階の廊下の奥、紫苑兄ちゃんのマイルームに連れて来られた。六畳一間。窓は一つだけ。部屋の内装は、ぼくとアキラの部屋とほとんど変わりはないが、紫苑兄ちゃんにはルームメイトがいないので、二段ベッドではなく、普通のベッドが右隅に幅を利かせている。室内唯一の勉強机の上には、黒々としたコルトパイソンが所在なさに一丁置いてあった。紫苑兄ちゃんはそれを手に取り、フレームを慣れた手つきで開いて、シンダー滑りを確かめてから、引き出

しの一番奥にしまった。

随分と、見慣れた光景だった。

「座れよ」

紫苑兄ちゃんは開け放った窓のサッシに腰掛けながら、ベッドの方を顎でしゃくるが、ぼくはこのままでいいと首を振った。

「……………なら、そのまま聞いてくれ」

紫苑兄ちゃんはジーンズの後ろポケットから煙草とライターを取り出して、あつという間に火をつけた。ちなみに銘柄はマイルドセブン。

不快でもなければ愉快でもない臭いが、室内に満ちて、やがて窓から侵入してくる風に攫われていった。吸殻を外に落とし、半分ほど吸い終わってから、紫苑兄ちゃんは静かに口火を切った。

「さつき、市森とかいう男と、二人のオバハンがすげー勢いで怒鳴り込んできてな……………」

なるほど、と半ば予想していた展開故に、後は推して量れるものだった。

自分の息子をこんなにした責任をどうとってくれるのか。

入院費と慰謝料のことも含め、この件は弁護士と相談させて貰う。バットで他人を殴るなんて、これはもはや殺人未遂ではないか。

聞けばその生徒は、これまでに何回もの問題行動を起こしているそうじゃないか。

歳がいつていればすぐにでも少年院にでもぶち込みたいところだ。これから学校の方にも赴くところだが、日を改めて伺わせていただく。

「でもな、重要なのはそこじゃねえ。その市森っていうのが市会議員らしくてよ、ここら一帯の開発を主張している派閥の幹部らしい。前々から、ここの土地を売り渡せて催促もしつこいくらいにきてたんだが、鯨木先生は頑として断り続けてた。そんなわけで、この一件で先生の立場が危なくなってたんだ」

紫苑兄ちゃんは最後にぶかあと紫煙を吐くと、携帯灰皿に吸い切

った煙草の残骸を押し込め、立ち上がった。

「悲しいけどな、これは事実だ。お前は、他の連中と比べて大人びてるし、実際大人以上の考え方も出来る。だから、俺は隠さずにありのままをお前に話すし、突きつける」

「……………」

「お前は、理由のない行動はしない。まあ、他の連中にも言えることだが、お前の行動には特に意味がある。昨日、零士がどつかの奴らが無惨に叩きのめしたって、俺は別にお前を責めたりはしない。それが、例えどんな結果に繋がろうとな」

ぼくの前で屈みこみ、わしゃわしゃと荒っぽく髪の毛をこね回す紫苑兄ちゃんは気持ちの良いくらいの笑顔で、

「心配するな、大丈夫だ。俺らは絶対に幸せになるんだ。そうそう不幸なんてのは、続きやあしないんだからよ」

と清々しく破顔する兄の顔を見て、ぼくはどうにか涙が溢れるのを堪えて、まったくもって情けないことに、またも「ごめんなさい」としか呟けなかった。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ぼくは、害悪です。

ぼく パピコ パイン飴

翌日。ぼくは学校へ行くフリをして、華麗なるサバタージュを決行した。ランドセルを裏庭の茂みにへと隠して、ぼくは行く先も定まらぬまま、駆け出した。

こんなことに意味がないということは、十分に理解していた。

だけど、ぼくは逃げ出さずにはいられなかった。どこにしようと、ぼくはこの息苦しさから解放されるなんてことはなかった。だから、せめて、ここではないどこかへ行きたかった。何もかも忘れて、この辛い現実から全力で目を背けたかった。

ぼくのせいで、ぼくのせいで、ぼくのせいで——みんなの居場所がなくなる。みんなが、離れ離れになってしまう。

『くじら園』が、ぼくのせいで消えてしまう。

エッシャーのような家並みが連なる住宅街を抜け、ゲルニカのような人間の波をかい潜り、どれだけの距離を歩いたのか、気づくとぼくは、知らない街の風景に取り囲まれていた。日は既に高く昇っていた。内側が張りつくような喉の渴きを覚えた。どこかに水分を補給できる場所はないかと、ぼくはフラフラと彷徨い歩いた。

いったいぼくは、こんなところで何をしているのか。

ここまで練り歩いてきたことによる疲労や、サンサンと降り注ぐ日差し暑さで、ぼくの思考回路は多少オーバーヒートしている可能性も否めなかったが、ぼくは自分でも驚くほどに冷静だということが分かった。

きつと、ぼくは救いようのないバカなのだろう。

くじら園のみんなは、大切な家族だ。紫苑兄ちゃんは、頼れる兄で。薊姉ちゃんは、優しい姉で。弟妹達は、守るべき存在で。

ジェウだって、ぼくが守らなきゃいけなかった。どんな形であれ、どんな結果であれ、ぼくはジェウに害する者全てを排除しなければ

ならなかった。ぼくらを指差して嗤う奴ら。ぼくらを平気な顔して苛めてくる奴ら。そんな人間ばかりで、ぼくはいい加減に嫌気がさして、わざと異端をふりまくような行動を繰り返した。

そしたら、誰も嗤う奴はいなくなつた。あからさまに苛めてくる奴も、逆らってくる奴も、同様に。

それ故に、今回の件は本当に久しぶりで、ぼくは愚かにも事の本質というものをまるつきり見失っていたのだ。

人を傷つけるという行為。人に暴力を振るうという真意。それが原因で引き起こる問題。それが、ぼくが犯した一つ目の《失敗》。

「……………」

と舌を垂らして喘いでいたぼくの前に、昭和の空気をそのまま引つ張ってきたような、年代を感じさせる駄菓子屋が、忽然と姿を現した。ふと周囲を見渡してみれば、そこはまばらに家と畑とが混雑する地域で、随分と長い旅をしてきたようだ。ぼくは今更ながらに痛感した。店先に鎮座する多種多様のアイスが放り込まれたクーラーボックスが、ぼくを欲望のままに誘惑する。そして実際にぼくはクーラーボックスを抱きしめるかのように肉迫し、ガラス越しに中の氷菓子達を愛でるように眺めた。ズボンの中身を無意識に探るが、埃と砂しか顔を出してこなかった。それでもまだ諦めのつかないぼくがうだうだとその場で地団駄を踏んでいると、

「きみ」

卵黄？ と一瞬思ったけど、すぐに『きみ』が『君』に変換された。ということは、誰かがぼくのことを呼んだということだ。

「アイス、欲しいの？」

その凜とした声があった方を向くと、外に設置されているあちこち塗装のハゲたベンチに、女子高生ぐらいの女の人が頼杖をつきながら座っていた。

「うん」

いやしんぼなぼくは、多少の期待を寄せて頷いた。

「そう」

その女の人はゆっくりと立ち上がり、クーラーボックスのふたを開けると、ゴソゴソと漁り始め、中から一つのアイスを取り出した。パピコ。

「これくださーい」

店内で会計を済ませてくると女の人は再びベンチに腰かけ、封を破り、パピコをポキッと半分に分断すると、その片方をぼくに差し出した。

「あげるよ」

「……ありがとう」

ぼくは素直にそれを受け取り、同じくお姉さんの隣に腰を落ち着け、ちゅーちゅーとパピコを吸った。気持ちがいいくらいに美味しく、五臓六腑に久しぶりの水分と冷たさが染み渡った。

「知らない人から物を貰っちゃいけない、って教わらなかった？」

「……」

いきなり、横からお姉さんが言った。ぼくは何か取り返しのない過ちを犯してしまったかのように、パピコから口を離した。

「あはは、正直だな。でも大丈夫。少なくとも私は、君のことを知ってるから」

「え……」

訳の分らないことを、彼女は言った。知っている？ ぼくのこととを？ けれど、ぼくは彼女のことなんてまるで知らない。そもそも初対面のはずであるし、仮に忘れているのだとしても、年上の知り合いなんて薊姉ちゃんや紫苑ちゃんを除けば、必然とその数は限られてくる。クラスメイトのような有象無象ならいざ知らず、どこかしら彼女のことは覚えていてもおかしくはない。

だがぼくの記憶によれば、このお姉さんの情報については、いつでもこの場面とも何ら符合しなかった。

ところが、彼女はぼくのことを知っているという。

謎。

不可解。

ミステリーである。

しかし、これが実は彼女の妄言という可能性もある。
いさなきれいし

「鯨木澪士。それが、きみの名前」

ぼくの推測はものの二秒で粉碎した。

「別に、驚くことでもない。私はきみのことなら何でも知っている」

「……お姉さんは、誰なの」

訝しげにぼくが尋ねると、お姉さんは愉快気に笑みを漏らし、

「——私は、堺崎さかいざき仙女。仙人の成り損ないであり、成れの果て……
せんな

と言つても分からないか。まあ、仙女さんと呼んでくれ」

ふふふふ、と仙女さんはパピコをくわえながら笑った。ぼくは彼女が言っていることはさっぱり分からなかったけど、それが冗談の類にせよ、おふざけの一種にせよ、薄汚いこのぼくに物を恵んでくれたことには変わりないので、ぼくは緩やかに警戒レベルを最低ラインにまで下げた。

「なんで、ぼくに話しかけたの」

何となく、彼女がぼくに声をかけてきた理由を尋ねる。

「別に、私はきみに干渉するつもりはなかった。でも、どうにも見
てられなくてね。つい話しかけちゃった、みたいな」

「ふうん」

それほどまでに、ぼくはクーラーボックスの前で哀れな醜態を晒
していたということだろうか。

それっきり、ぼくらは沈黙を保ったまま、黙々とパピコを吸い続
けるという作業に没頭した。

「澪士。きみは何を悩んでいる」

唐突に口火を切った仙女さん。ぼくは彼女の言葉の意図が分から
ない。

「そついう顔を、きみはしている」

「……分からないよ」

仙女さんのいう通り、確かにぼくは悩んでいる。だが、もはやいたい何に対して苦悩を抱いているのか自分でも定かではないのだ。「……妹を傷つけた奴らに、仕返したんだ」

気づくと、ぼくは胸の内に溜まったどす黒いモヤモヤを語っていた。仙女さんの不思議な雰囲気にあてられたせいもあったが、ぼく自身、誰かに話を聞いてもらいたかったのかもしれない。

「そうしたら、結局は家族のみんなに迷惑をかけちゃった」

「きみは、後悔しているのか」

「……………ううん」

多分、ぼくは後悔なんてこれっぽっちもしてないんだ。こんな最悪な結末になってしまったけれど、ぼくは奴らに報復せずにはいられなかった。

だってそれは、ぼくという個体における存在の不確定さを補うために必要な行為だったから。

「だったら、いいじゃないか」

仙女さんは、吸い切ったパピコを端に設置されていたゴミ箱に投げ入れた。ぼくはまだチンタラと吸飲していたが、やがてこのパピコにも同じ運命を辿らせた。

「少なくとも澪土が後悔してないっていうんなら、それはそれでいいんじゃないのかな」

事も無げに言っただけのける仙女さんは、慈しむようにぼくの頭を撫でた。その感触はどこか懐かしくもあり、ぼくはただ柔らかいその手の平を享受した。

「先のことなんて、誰にも分からない。だからって悔いの残らぬよう生きるとは言わないけど、澪土は澪土らしくあればいいと思うよ。例え他人に迷惑かけたって、犠牲を強いたって、それはきっと仕方のないことなんだよ。人間というのは誰かに迷惑をかけてなんぼのものだし、人生というものの自体が誰かの犠牲で成り立っている以上、その因果は決して覆せない」

私は、今までずっとそれだけを視てきた、と仙女さんはおもむろ

に立ち上がった。

「けれど、その事実を真摯に受け止めることが出来る澪土は、とても優しい子だ。だから――」

考える。

仙女さんはぼくの正面に回りこみ、視線を合わすように屈み込んでから、包み込むようにぼくの両手を握った。

「何を、考えるの？」

ぼくはベンチに腰を下ろしているにもかかわらず、何となく足元が覚束ないような感覚に支配された。見上げる蒼穹も、どこか歪に捻じ曲がっているように思えた。はっきり言って、ぼくは自分という概念が不安定に揺らいでいくのを感じた。

ここは、ぼくの知らない場所――異界なのだと。

「その優しさで、考えるんだ。最善と最悪を。その先の未来を。澪土自身の選択を」

そのまま、ぼくを引き上げるようにして起立させる。

「分かったか、澪土。最善を祈りたいのなら、最悪に備えるしかないんだ」

きみにはきみしか出来ないことがある。

ぼくは熱に浮かされたように、自然と考えもなしに頷いた。この時、まともな思考が出来ていたかどうかは非常に怪しい。しかしぼくはこれ以上にないくらいの安心と勇気を得ていた。重苦しい枷から抜け出したみたいな、暗い深海からようやく海面へと顔を出せたみたいな、軽快な興奮を孕んだ心地。

「……よし、いい子だ。それじゃあ、帰ろうか」

そう微笑んで、仙女さんはぼくの手をひいて歩き出す。

「帰る？ どこに？」

「勿論、きみの家にだよ」

このお姉さんは、もしかしてぼくの現在住所まで把握していると

いうことだろうか。

「言っただろう。私はきみのことなら何でも知っていると」

ふふん、と仙女さんは誇らしげに鼻を鳴らした。ぼくは頃になつて彼女のことを少し薄気味悪くなる。もしかしたら、ぼくはこのまま黒尽くめの男達がいるところに連れて行かれて、謎の薬を飲まされ小さくされてしまうのではないだろうか、とぼんやり想像するあれ、そうしたら十歳のぼくは何歳にまで若返ることになるのだろうか。

「けどぼくは、あなたのことを何も知らない」

とりあえずは勝手なイメージに終止符を打ち、思いのままを口に出してみる。

「当然だろう。こうして直接会って言葉を交わしたのは、今回で初めてだからな」

「……？」

ますます謎である。

うーん、とぼくが脳のシワと、眉根のシワを同時に寄せていると仙女さんは困ったように苦笑してから、突然ぼくに飴ちゃんをくれた。中心に穴が空いた、パイン飴。まるで、それ以上の思索は無駄だよと言わんばかりに。ぼくは少し納得のいかないまま、無造作にパイン飴を尻ポケットに突っ込んだ。飴ちゃん程度で揺れ動かされる子供だとは思われて欲しくなかった。

「まあ、深くは考えなくてもいい。ただ私は、きみが明日に生きていくことだけに焦点を置いてる存在だ。ある人間の遺言から、単に私は動いているだけに過ぎない。別にきみが私を知らずとも、なんら問題は発生しない。むしろ好都合でさえある」

「でも、今日でぼくは仙女さんを知っちゃったよ」

上目遣いで彼女を見上げながらぼくが言つと、仙女さんは虚空を見据えながら、寂しそくに微笑んだ。

「大丈夫……きみは、私のことを覚えてはられない。明日になればきつと、きれいさっぱり忘れているはずだ」

「そんなことは、ないよ」

十歳の記憶力を舐めすぎである。

「いや……そういう風になっっているんだよ」

それは、決してぼくの方に責任があるような口調ではなかった。むしろ自らを責め立てるような、厳しいものだ。この繋がれた手が、急に歪んでいき、不確かな感触にすり替わっていくような気がした。ぼくの見上げる視線に、仙女さんは柔和で儂げな微笑で応えた。

不意に、既視感にも似た感覚が全身を駆け巡る。

この笑顔を、ぼくは知っている。

慈愛に満ちた、まるで《母親》みたいな優しい表情を。

ただ、残念ながらぼくの意識はそこで途切れている。

ふと我にかえれば、ぼくはあの神社の境内に一人で突っ立っていた。どうやら既に逢魔ヶ時を迎えているらしく、暮れなずむ夕日が足下の影を長く伸ばしていた。ひぐらしの合唱団がもあちこちから演奏を開始していて、ぼくはじっと立ち尽くしたまま、しばらくそのうるさいほどに鳴り響くコーラスに耳を澄ました。

「湊士！」

入り口の鳥居から聞き覚えのある声がして、ぼくは首をもたげた。「湊士！　ようやく見つけた。お前今までどこ行ってたんだよ」

息を切らした様子で近づいてきたのは、紫苑兄ちゃんだった。

「……………今まで？」

言葉の意味が理解出来ず、ぼくは疑問符をかかげる。

「ああそつだよ。学校にも来てないって連絡がきて——でも全

然帰ってこねえし、こつちは一日中探し回ったんだぞ！　いつたいどこで油売ってやがったこのバカっ」

「……………」

「……な、なんだよ、ちよつとオカシイぞ遷士。どうした、どこか具合でも悪いのか？」

「……ぼく、今まで何やってんだっけ」

「は？」

「なんか、思い出せないんだ。今日一日の行動が、まったく……」
くじら園から飛び出したとこまでは覚えている。だが、そこから先の記憶がどうにも曖昧でフニャフニャしたものだった。

「お、おい、熱中症にでもなってるんじゃないのか……大丈夫かよ？
ほら、家まで負ぶってやるから、乗れ」

紫苑兄ちゃんは屈みこんで、ぼくに背中を向けた。どこか頭に薄くモヤがかかったみたい、ぼうとした意識のまま、黙って素直に紫苑兄ちゃんの背に抱きついた。

「……う、おつ、重っ！？　ってか、いつの間にこんな重くなってやがったんだよ。兄ちゃんビックリだぜ」

「……ビックリさせちゃったぜ」

あつはははは、と紫苑兄ちゃんは楽しそうに笑った。

そこでぼくは、尻のポケットで力サカサと音を立てる存在を発見した。手を入れて確かめみると、そこには包装紙に包まれたパイナップルがあった。はて、いつ誰に貰ったものなのか、てんで見当がつかなかった。けれど、特に考えを労さなかったぼくは、紫苑兄ちゃん頭上で迷いもせず封を裂き、輪っか状の黄色いキャンディーを口に放り込む。

もごもごと舌の上で転がすと、爽やかな甘酸っぱさが口内に広がった。

ほつと心が安らぐような、しかしどこか物寂しい味であると、ぼくは優しい兄の背に身を預けながら、なんとなく、そう思った。

翌週の放課後のこと。ぼくは彼女のいる図書室へとまっすぐに赴いた。

「そろそろ、来る頃だと思ってたよ」

いつものように窓際の定位置の席に腰を下ろしていた鳴神千曲は、無意識の内に惹きつけられてしまうかのような、その歳には到底そぐわない妖艶な笑みを浮かべていた。無論、バディであるウサ吉も同伴しており、相変わらず彼女の膝の上でくたびれていた。

ぼくは多少なりと嫌な種類の緊張を孕みつつも、彼女と真正面から対峙する。

「……………お前なら、知ってるんだろ」

ぼくが、ぼくの家族を守ることが出来る方法を。

「鳴神、教えてくれ。ぼくはいつたい、何をすればいい」

鳴神千曲は、怪しくも満足気に目を細めた。

ぼく 失敗 鳴神

ぼくはいつたい何をすればいいかって？

それは、とても簡単なこと。

あくびが出るほどに単純なこと。

ただ、私にお願いすればいい。

助けてください。あなたの力を貸してくださいって。ん？ ああ、別に君は何もしなくていいの。全て私に任せてくれればそれでいい。別段、君に出来ることなんて何も無い。君が君として出来る事は、精々私に縋りつく程度。けれど、別にそれを悲観しなくてもいいの。君が私に縋りつく——それだけで、君が抱える問題の全てが片付くのだから。ねえ？ これ以上君にとつての最善な働きがあるかしら。まあ、慌てず騒がず大人しく朗報を待つていればいいわ……え？ なんでそんな親切かですって？ クスス。随分と平和な思考回路をしているのね。私にそんな慈悲深い神経なんてないわよ。勿論、君からはそれ相応の対価を貰うわ。クスツ、何かって？ それは君の問題が解決したときに改めて教えてあげる。なに、大丈夫よ。金銭関係じゃないから安心して。それは、君にしか払えないものだから。それまでは楽しみにしておくといいわ。

クスス。

果たしてその選択が間違っていたとか失敗だったとか、悔やみに悔やんだところで、ぼくにはその道しか残されていなかったのだと思っし、ぼく自身が犠牲なることで家族のみんなが離れ離れになること防げたなら、それ以上に万々歳なことはない。いや、そもそも問題を引き起こしたのがぼくであるわけだから、今回の件はマツチポンプ以外の何ものでもないのだ。

ぼくは、鳴神に頼るほかなかった。

その結果、いったい何が起きようと知っていたとしても、最終的にぼくはアイツに頼らざるを得なかったのだ。
だけれども。

「鳴神」

ぼくは誰よりも早い時間帯から校門で待ち伏せをしていた。そして、リムジンで送迎されて到着した彼女を、ぼくはようやく捕まえたのだった。

「あら、怖い顔の鯨木くん」

「——っ！」

ぼくは反射的に息を呑み、二の句を継げなかった。

どうして、こいつはこんなにも楽しそうな顔をしているんだ。

「クスス……話があるのでしょう？ いいわ。少し場所を移しましょうか」

そう言って鳴神はリムジンを指差し、一人ですたころと歩き出した。ぼくは何も言えずに彼女の後についていった。

「この分だと、授業はサボるしかなさそうね」

クスス、と鳴神が小さく笑うと、ツインテールが連動するように

小さく揺れる。

リムジンの革張りの臭いに咽かえりそうになりながらも、彼女に追隨して着いた先は自然公園だった。車は公園の入り口に停車させて、ぼくは鳴神に導かれるまま、公園内に踏み込んだ。チラリと背後を振り返ってみると、黒スーツにグラスンといった、いかにもなSP風の運転手さんが、車内からぼくのことをじっと見据えていた。言いようのない恐怖に捕らわれたぼくは、すぐに前を向いたのだった。

その自然公園は、校庭が三つ分ぐらいの広さで、中央には鯉の泳ぐ大きな池と、敷地の周りをぐるりと樹木によって囲われていた。それなりに遊具も充実しているスペースもあり、遊んだり、散歩をするのにもぴったりもってこいの場所であつたが、今は奇妙なくらいに人氣がなかった。早朝ということもあるが、ジョギングや犬のリードを引く人がいてもおかしくはないというのに、人っ子一人見かけられなかった。

まるで、ぼくと彼女の為に用意された空間であるかのように。

「それで？ 君は私に何を訊きたいのかな？」

鳴神はバディであるくたびれたウサギのぬいぐるみを抱擁したまま、正面に池を臨んだベンチに腰を下ろした。そこには日陰を作るためか、藤棚が設置されてあつた。

それにしても、今日の彼女は驚くほど雄弁だ。まるで今までの言葉少ないキャラ性が嘘だったかのようだった。いつもは何を考えているんだか分からないような表情も、現在は薄っすらと不気味な笑みを湛えていた。

まるで、可笑しくて可笑しくて堪らないのを、じっと我慢しているかのよう。

「お前は、何をした？」

「してないわ、何も。ただ、君の願いを聞き届けただけ」

「お願い……？ ぼくは……ぼくは！ 一つお前に人殺しを頼んだんだよ！」

ぼくはこれ見よがしにポケットに突っ込んでおいた新聞の切り抜きを突きつけた。これといって大きなものではない。地方の新聞の片隅に載っているような小さいものだ。

エリート市会議員の自殺、と見出しでそこには書かれていた。

——昨日の夜、市森和哉さん（四十四歳）が、自宅で首を吊っていたのを妻の富美子さんが発見した。搬送先の病院で死亡が確認され、遺書も残されていることから、警察当局も事件性は薄いものとして捜査を進めている——。

「おい……何だよ、これは。ぼくがお前に望んだことは、こんなことじゃない！」

鳴神は、まったくもってつまらなそうにぼくを見返した。

「私にも、これといって殺害の意図はなかったわ。でも、結果的にそうなってしまっただけの話」

「じゃあなんだよ、この記事は。人が死んだって何なんだよ！」

「くだいわね。言ったでしょう、それは結果に過ぎないって」

呑み込みの悪い生徒を教える教師のように、鳴神は面倒臭そうに嘆息して、膝の上に乗せたウサ吉を弄び始めた。

「私は、君が住んでいるあの地域一帯の開発を薦めている派閥の首謀者に、ほんの少しの外圧を加えただけ。彼が自殺を図ったのは、私としても予想外だったわ。見た目と違って、メンタル面が驚くほど脆弱だったのね、きっと。まったく、圧力というのは匙加減が難しいわ。まあ私も私で、人の精神の脆さというものを存分に学習出来たし、なかなか良い経験を積めたわ。君にとっても、結果的には君の居場所がなくならずに済むわけだから、めでたしめでたしじゃなくて？」

「えーウサ子おー？」と鳴神は自分の相棒に同意を求めた。ウサ子はコクコクと首を縦に振った。無論、彼女がウサ子を操っていたわけだが。

「……………なにが、『めでたし』だよ」

わなわなと震える拳を、ツタの絡んだ屋根の支柱に思いつきり叩きつける。柱はビクともせず、ぼくの手がジワリと痛んだ。

「人が、死んだんだぞ！ お前は、それで何も思わないのかよ！」
「なら、君は知っているのかしら？ 世界では一日におおよそ十五万の人々が死んでいるのよ。日本だけでも、毎日約三千人が死んでいる。そう考えると、たかが一人くらいの生き死になんて、瑣末で些細なことだとは思わないかな」

その一言で堪忍袋の限界を超えたぼくは、鳴神の胸倉を締め上げた。

「デメエっ……………まさか、そこまで人間捨ててるとは思ってたなかつたぜ」

彼女は至極冷めたような目つきで、

「離しなさい」

と見下したように言った。

頭に昇った血もやがてゆっくりと下降していき、ぼくは大人しく彼女から手を離れた。

「鯨木くん、君は《力》というものを知っているかしら？」

また例の薄気味悪い微笑みを浮かべて、鳴神は滔々と語りだす。

「——君が『鳴神』の名をどう認識しているかは知らないけど、こちらの中小財閥や土地成金などと思ってもらっては大いに困るわね『鳴神機関』……………といっても、多分君には分からないか。身内喰らいだとか、穢れた血だとかって揶揄されることもままあるけど、詰まるところ、君の想像を遥かに超越した巨大な《力》が、私の背景にはあるの。そしてそれは、『鳴神』の名を背負う者にとっては、いかにせん避けようのない宿命」

「……………わ、訳が分かんねえことほざいてんじゃねえよ」

「別段、君に理解してもらいたいわけじゃない。ただ、こんな子供の自分にでも、ある程度は『鳴神』の力を自由に扱うことが出来るということよ」

自身の胸に手を当て、鳴神は続ける。

「それから鯨木くん、君は何か一つ大切なことを忘れてはいやしな
いかしら？」にやりと歪む口元。「君はまだ、私に対価を払ってい
ないだろう？」

「対、価……？」

ぼくはその言葉を呟いてみて、もともと口内で反芻させた。

「言ったでしょう？ 望みを叶えてあげる代わりに、それ相応の対
価を頂くって。その内容は成果が出るまでは内緒っていう約束だっ
たものね。クسس、それじゃ教えてあげるわ。それはね、君にしか
—— 鯨木湊士という人間にしか払うことのできないもの——」

鳴神は、

「私はね、君が欲しいんだよ」

「…………… どういう意味だ、そりゃ」

「額面通り、そのままの意味さ」

私は君が欲しいんだよ、と彼女は再びその台詞を口にした。

「わ、わけわかんねえ……」

ぼくは途端に恐ろしくなった。急いでこの場から尻尾を切り落と
してでも逃げ出したかった。唐突にこの少女が、どうにも得体の知
れないバケモノのように思えたのだ。

「さあ、結果はどうあれ、私は君の望みを果たした。今度はそちら
の番だよ」

「し、知らないっ…………」

ゾワツと全身が粟立ち、ぼくは気圧されたように一歩後ずさった。
「知らない？ 鯨木くん、君はいつたい何を言っているのかしら？」

「しらっ、知らないっ………… ぼくはこんなことになるなんて知らなか
った。対価が、ぼく自身…………？ い、意味分かんねえんだよ！」

「仕方ないわね。それじゃあ、そんな頭の残念な君にも分かるよう、
単純明瞭に言い換えてあげる。私はね、最初から君だけが目的だっ

た。だから、この展開に至るまでの筋道を組み立てた」

何を、言っているんだ？

ぼくの思考は完全においてきぼりをくらっていた。

「端的に言えば、君の暴力の餌食になったあの三人に猫の存在を教えたのは私だし、加えて薬物の入手方法を吹き込んだのも私」

つまり、事の黒幕は私ってわけ。

クスクス、と鳴神は感情のこもらない瞳で、人形みたいな顔を綻ばせた。

それで、このぼくはどうしたかと言うと、

「……………はっ」

思いつきり鼻で笑ってやった。何も混乱の果てにオカシクなったわけではない。だって、あまりにも真相が予定調和すぎて、逆にぼくはある種の安心感を覚えていたのだった。

こいつは何かを知っている——知り過ぎている。ずっとそんな感じはしていた。だから、さして驚くことでもない。ぼくは半ば予測してすらいただの。

彼女の口からその事実が告げられることも。

故に、ぼくはその何ともシンプル過ぎた解答に、思わず拍子抜けしてしまっただけなのだ。

「はっ、とんだマッチポンプじゃないか、この詐欺師め」

「詐欺師とは心外ね。こっちはあくまでもフェアに臨んでいたんだけど。選択肢は与えたし、考えるだけの猶予も余裕も与えたつもりなのに」

「な、なにがフェアだクソッたれ。お祭りも宴もとくに終わってんだよっ」

「あら、どこへいくの？」

踵を返して歩き出すぼくの背中に、鳴神は呼びかける。

「これ以上、お前なんかにつき合ってられるか。対価なんて知らない。っーかこんな契約は無効だ」

対価なんぞ誰が払ってやるものか。

そもそもお前が引き起こして、お前自身が決着をつけた事件なんだから。

ぼくは何ら関係ない。

人が死んだのだって、ぼくのせいなんかじゃない。

人殺しはお前だ！

「アッハハハッハハハハハハハハハハハッハッハ！」

鳴神が声を立てて晒った。

いつものような含みのある嘲笑ではない。これまで我慢してきた衝動を解放するように、彼女は腹を抱えて嗤っていた。

「アハハッ、契約破棄？ いいわよ、それが君の答えだというのなら、私はこれで心置きなく君を壊すことが出来る。君の居場所も、君の家族も、全部！」

「な、なにを……」

「あら、もう忘れてしまったの？ 私には、『鳴神』という力がある。やろうと思えば、初めから君の存在なんてどうとでもなったのよ。それでも、私はあえて君に選択権を与えたの。お分かり？ この展開を用意したのは私だけけど、この結末を選んだのは君自身なのよ。君が約束を破るというのなら、当然ペナルティというものが発生する。だから、君が大切にしているものを丁寧に一つずつ、完膚なきまでに壊してつてあげる」

なおも彼女は狂気じみた笑みで、ぼくに言い放った。

「私はね、随分と君に対して譲歩したつもりなのよ？ それでもイヤだって言うなら、仕方ないわよね」

おもむろにスカートのポケットから、何かの電子機器を取り出した。おおよそ察しはつくだろうが携帯電話である。その頃はまだ世間一般にもそれなりに珍しく、当時じゃあ、おおよそ小学生如きが持ち合わせることも非常に珍しかったものではあるが、ぼくはそれが何か良くないものだというのを、本能的に感知したのだった。

ピッ、と鳴神がその携帯電話のボタンを押し、ゆっくりとした動作で耳にあて、

「……ええ、そうよ。今すぐ鯨木湊土という人間の周囲を、何もかも全て——」

潰して。

ぼく ぼく ぼく

潰して、と告げる冷め切った声。

「や、やめろ……」 ぼくは一も二もなく鳴神に、文字通り縋りついた。「やめてくれ！」

「……………ふうん」

軽く鼻を鳴らした彼女の足下で、迷うことなく膝を着き、額を何度も何度も地面に擦りつける。なりふりなんて構っていられなかった。こいつは、本気だ。そして正気じゃない。こいつは、ぼくの家族を平然と奪っていくだけの力も、残虐も持ち合わせている。それは確かなのだ。

「や……やめてください、お願いします。やめてください。何でもします。何だってしますから——だから、お願いですから、ぼくの家を、家族をとらないでください」

「……………なら、大人しく私のモノになるってことかしら？」

コクコク、とぼくは必死に首を縦に振った。

「そう」

彼女は満足そうに微笑むと、ぼくの顎に手を這わせ、これから自分の言うことを復唱しろと命じた。

「な、なにを……」

「いいから、君はただ私に後に続いて呟いていけばいい。ほら、我、鯨木湊士は——」

「わ、我、鯨木湊士は……」

鳴神の声を追いかけて、ぼくはたどたどしくも言葉を紡いでいった。

《我——鯨木湊士は、鳴神千曲をいついかなる時でも、裏切らず、見縊みくひらず、無上の親愛の証と、無償の真実とを明かし、平伏し、服従し、遍あまねく御身おんみの絶対となり、奢あまたらず、怒らず、数多へいがいの弊害と障害

の盾となりて、殉^{じゅん}ずるはその意思にのみ、儀となすもその御心^{みこころ}のみ、
我が身は契約と誓約をここに掲げ、等しく頭^{うつけ}を垂れる者なり」

訥々とながらも、どうにかその詠唱めいた呟きが終わり――

「――うっ」

不意に、ドクンと心臓が激しく脈を打った。自分の中で、何かが
無理矢理に書き換えられていくような、言葉では表現しがたい衝動
を感じた。

「クス……クスス、本当にこれで、ようやく、私は……」

何故だか、息がうまく吸えなかった。ゼーヒューと不規則な呼吸
を繰り返して、うずくまるように彼女の前で平伏すぼくは、助けを
求めるように顔を上げると。

眼前には、鳴神の靴があった。

「舐めなさい」

いつになくくたびれたご様子のウサ子を膝に抱えたまま、ベンチ
に腰を落ち着けて、彼女は恍惚とした、嗜虐的な微笑みを浮かべ、
ぼくを見下ろしていた。

「……………」

気が狂うほどの息苦しさから、ぼくは何も言えずに、目の前の情
景をぼんやりと見据える。純白のワンピースの裾から伸びる、細く
て青白い生足。その先にあるのは、赤いリボンが宛がわれた皮製の
ショートブーツ。これを、舐めろというのか。舌を垂れ下げ、唾を
撒き散らし、さながら駄犬のように尻尾を振って、歓喜しながら舐
め回せというのか。

ふざけるなよ。冗談じゃない。

「ほら、何してるの？ 早くお舐めなさいよ」

君は私のモノでしょう、と鳴神は湧いて出る興奮を押し殺すよう
に、ぼくを急かした。

ああ、何だろうか。段々と理性が溶解していくような感覚に、ぼ
くの思考はぐらぐらとその軸を失っていく。虚ろに陰っていく瞳が、

周りの風景を淡水画のようにぼかしていき、自分が自分でなくなっていくような心地に、ぼくは――

「舐めろ」

ふと気づけば、ぼくは彼女の靴にしゃぶりついていた。滴り落ちる唾液が、ブーツに黒い染みを作る。砂利のざらついた舌触り。しよっぱいような、気持ちの悪い味がした。でもぼくは、ピチャピチャと唾液を織り交ぜながら、舌を這わせ続けた。どうしてだか、その瞬間だけぼくの心は、現実に行われているおぞましい醜態とは真逆に、清々しいほどの安らぎで満ちていた。変則的に乱れていた呼吸も元の状態に戻っていた。

脳味噌がとろけたように機能しない。だが、既にぼくの中では全てがどうでもよくなっていた。この身の毛もよだつような所業にさえ、快楽的な劣情を覚えてくるほどだったのだから。

「――あがつ」

突然に、顔面中央に伝わる衝撃。無様にも尻餅を着く。燃えるような熱が鼻頭にへと集まり、大量の鼻血が両穴から溢れ出した。そして、自分は蹴られたのだと、とようやく理解に至る。

「醜い」

鳴神は、心底侮蔑するような冷笑をぼくに向けていた。ぼくは訳が分からず、しばし呆けたように視線を彷徨わせていたのだけれど、やがて、

「笑え」

と、鳴神から次の指令がきた。

蹴られた鼻も痛かったし、鼻血だって未だに流れ続けていて、服のあちこちにブチ模様の赤いペインティングを施していた。それにしても、こんなまともじゃない状況で、いったい誰が笑えるというのか。少なくとも正常な神経を有している者なら、一も二もなく嫌悪に歪んだ渋面を返すであらう。

だから、ぼくは。

もう、まともなんかじゃ
いられないんだ。

「キヤハハハッ、キヤハハッハッハハハッハハハハハハハ
アツ!!」

「アハハハツ、もう、この子はいらぬ。いらぬ！　だつて、新しいのが手に入ったんだもの！」

「いけない！　いけない！」と連呼する度に、布の裂ける音がし、中身の綿が周囲に飛び散った。

キャハハハッ、となおも彼女は無我夢中でウサ子の解体作業に精を出していた。

地面には、もはや原形の欠片もなくなったウサ子の身体の断片が

あちこちに散乱していた。いつか、ぼくもこうして彼女にバラバラに切り刻まれてしまうのだろうか。例えそれがぼくの運命だとしても、既に時は遅いのだと、嫌が応でも解ってしまう。

ぼくは彼女のモノ。

いずれにせよ鳴神が言うとおり、ぼくはこの結末を選んでしまったのだから。

「クスス。ねえ、鯨木くん——いえ、湊士……これから君は、誰の物でもない。私だけのモノ。一生、私から解放されることはないの。君は私を肯定し、私も君を肯定し続ける。だから、私達は決して孤独ではないの。ねえ、それってとってもとってもステキなことだと思わない？」

うつとりするような表情で、鳴神はゆっくりと肉迫してきて、赤黒く汚れたぼくの口元を、《べろり》と躊躇もなく舐めとった。

「アハハハッ」

鳴神は笑う。単純に、簡潔に、ただ愉快そうに。歳相応の、少女らしい無垢な笑顔。思わず網膜のファインダーに焼き付けたくなくなるような可愛らしさで、それはぼくの全てを奪っていった。

なるかみちくま
鳴神千曲。

クラスに一人はいるような、本ばかり読んでいる、無口で謎めいた女の子。

そんな愚かな勘違いをしていた時期が、吐き気がするほど懐かしく思える。

いったいぼくはどこで分岐点を間違え、道を誤り、正規のルートを踏み外したのだろうか。

果たしてぼくは、いったいどんな《失敗》を犯したというのか。しかして、誰もぼくの為には答えちゃくれない。いや、そもそも解答なんてのはどこにも用意されちゃいないんだ、きっと。

それでも、解答代わりの何か欲しいというのなら、この代理品みたいな現実を素直に受け止めるしかないのだろう。

どうしようもなく、救いようもないこの現状を。

「クスス」

パーゴラが落とす日陰の中で、互いの視線を絡みつかせ、ぼくと鳴神はただ静かに見つめ合う。

そして、ぼく達は唇を交わした。

後書き代わりの休憩

ノーペインノーゲイン。

直訳すれば、痛みなくして得るものなし、といった具合で、代償を払わずして何かを得ることなんて出来ないという意味合いらしい。たかが十年かそこらしか生きていなかった当時の『ぼく』でも十分に理解出来る内容だったし、ある程度の物事は実際その通りなのだと今でも思う。

——別に欺瞞とまでは言わないが、しかしてどんな事柄にでも例外はつきもので、特に鳴神千曲はその最たるものだった。彼女は何もかも持っていた。性格云々を除けば、容姿端麗で、頭脳明晰で、家柄も良くて、金だって権力だって人望だって、彼女が欲しいと思えば何だって手に入ってたであろう。

だからこそ、彼女は何一つとして持ち合わせていなかった。周囲から全てを与えられて、自分の力で手にしたものなど、これまで一つたりとして存在していなかったのだから。

彼女が本当に欲しかったもの。それがいったい何なのか、その頃の『ぼく』には全然分からなかったし、現在の自分にも、残念ながらさっぱりと見当がつかない。

仮に判断がついたのだとしても、おそらく過去の『ぼく』も、今の自分も、鳴神千曲という人間について、完全に理解するまでには至らなかっただろう。

ああ、だから彼女は、自分をバカ呼ばわりするのかもしれない。

あの人間味の薄い、人形みたいな微笑みで。

それでもおそらく、俺が一人で語れるのはここまでだと思う。ここまでが限界なのだと思う。というよりも、ここまで物語れた自分自身をむしろ褒めてあげたいくらいだ。今こうして語り終えた時点でも、目眩と吐き気のゴールデンコンビが襲い掛かってきて、まともにも立つことも出来ないんだ。

なので次回からは、多分別の誰かに協力を仰ぐことになると思う。
誰になるかは、俺にも分からないけどね。

それよりもさ、ちょっとでいいから休憩を挟ませれくないか。
本当、もう色々と辛くて、しんどいんだ。

加えてこれから先のことも話さなくちゃならないと考えると、なおさらね。

さて、次はどこから話せばいいのか……なんて台詞は、今更わざわざ
とっばいか。

ああ、分かってるよ。逃げはしないさ。ちゃんと正面から向き合
ってみせるよ。

でもさ、やっぱり苦しいものは、どう足掻いたって苦しんだよ。
殊更、自分の人生となるとね。

後書き代わりの休憩（後書き）

第一部

ぼく 十歳 異端

終了

というわけで、やっとこ一区切りつきました。

なんだかやつつけみたいな感じもありますが、まあ、これが今の自分の精一杯ということ。

とかね、とりあえずこの話は、自分の拙作である『魔王の息子』の主人公である鯨木濤土の過去偏になります。そちらをお読みになった方でしたら、ご理解いただけるかもしれませんが、その他の読者様にはハア？ ですよ。

ふと訳もなく思いついた限りを書き散らした結果がこれだよ。特に反省はしていません。

にしてもようやく落ち着きました。次の章では、彼が12歳の頃の話を書こうとか予定していますが、しばらくは更新できそうにないです。

書き溜まったら、一気に放出するつもりですが。

では、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。感想お

待ちしております。

またいつか、突発的に更新するつもりですので、その時よろしく
です。
蝉でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012r/>

贖罪の忌み子

2011年11月16日10時43分発行